

歯学部ニュース

令和5年度第2号（通算144号）

特集 歯学部卒業おめでとう
歯学部生の活動 ～翌春に向けて
留学に行こう

目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 井上 誠	
副病院長から 多部田康一	
卒業生のことば 早川 杏梨・福井 智子・柳舘 快利・菅原 笙子・瀧澤 侑加	
令和5年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	10
沢田 詠見・那須 優介	
令和5年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名(9月修了者)	
臨床研修修了にあたり	13
菅沼 雄大・小林 優佳	
特集2 歯学部生の活動	15
翌春に向けて	
芝野 智果・田邊 魁・昆 ゆうり・大橋 薫・高山 良太・加藤 万葵・橋本 宙	
山本 采奈・五十嵐清華・向井 光優・森田 壮・加藤 由佳・水上 大河	
SCRP報告	
西村 隆之	
6年生国際学会参加報告	
安藤 まな・坂上 莉奈・後藤 崇	
特集3 留学に行こう	32
日吉 巧	
総務委員会だより	33
井上 誠	
部活動紹介	35
ゴルフ部 大濱 正篤・卓球部 清水 香奈	
早期臨床実習を終えて	37
石塚 蓮・佐藤 知香・水間 希美・吉倉 真帆	
ポリクリを終えて	40
荒井 友菜・高平 亜惟	
学会受賞報告	42
高嶋真樹子・新美 奏恵・小田島あゆ子・柴田佐都子・三村 俊平・笹川 花梨・青柳 裕仁	
土橋 梓・浅見 栄里・笠原 公輝・大川 純平・Ma. Therese Blanche Sta. Maria	
素顔拝見	54
石田 陽子・小貫和佳奈・朴沢 美生	
留学生紹介	57
Finsa Tisna Sari・Vanessa Utama	
退職によせて	61
魚島 勝美・小林 正治・齋藤 功・吉羽 邦彦	
技工部だより	68
佐藤 秀行・清水 浩紀	
論文紹介	70
佐藤友里恵	
新潟歯学会報告	71
大島 邦子	
同窓会だより	72
野内 昭宏・渡部 彩花	
教職員異動	75
ミニコラム	77
歯学部を支える方々 石栗真理子・小西 充	
編集後記	79





歯学部卒業おめでとう

新潟大学歯学部長 井上 誠

歯学科第54期生、口腔生命福祉学科第17期生の皆さんへ、ご卒業おめでとうございます。このたびめでたくご卒業される皆さんに、歯学部全教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者をはじめご家族の皆様方におかれましても、心よりお祝い申し上げます。

世界的な感染拡大が続いた新型コロナウイルス感染症もようやく収束から終息に向かいつつあります。新型コロナは2023年5月6日をもって感染症法上の位置づけが5類に移行し、現在は感染症の収束状況を見つつも、各種の制限はほぼ緩和されてきています。新潟大学においても、病院勤務者以外のマスク着用義務は推奨レベルになりました。

さて、皆さんの生活はコロナ前に戻ったといえるのでしょうか。収束後の我が国の社会・経済は、想定された以上にフェーズを異にする新たな社会・経済へと不可逆的な進化を遂げているように思えます。長年にわたる慣行・慣習が崩されるとともに、デジタル化・リモート化を前提とした活動がシフトから定着に向かい、人員削減や効率化が重視されるようになり、個人、団体、社会といったあらゆるレベルにおいて変革が生まれる中で、皆さんの周囲もまた新たな価値の創造への必要性を迫られているように感じます。

求人検索エンジンで知られるIndeedでは、対面での会話の重要性を強調しています。そこには、ノンバーバルな合図の読み取り（空気を読むこと）、ホワイトボードや紙面を使った視覚的効果などを含むコミュニケーション中で複数の人間が同じ場所に集うことにより生まれる新しいアイ

デア、インターネットなどのテクノロジーに左右されないコミュニケーション、新しい人間関係の構築（初対面でのつながりの実感）、デジタル通信では行われることの少ない雑談から生まれる創造性、センシティブな内容に関する誤解の回避、集中できる環境（ながら仕事ができない）などの重要性が含まれています。コロナ禍において注目されたリモート機能、すなわちZoomなどでのオンライン会議や遠隔授業などは、その利便性に注目が集まった反面、改めて対面でのコミュニケーションの重要性を見直す機会となったように感じます。そしてそれは、歯科教育にも大いに当てはまります。

コロナ禍にあって、日本の歯学教育においては大きな改革がありました。歯学教育モデルコアカリキュラムの改訂です。そのキャッチフレーズには「未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成」が掲げられています。そこでは、新型コロナウイルス感染症の流行や、人工知能等の情報・科学技術の活用等による医療技術の高度化、超高齢社会での多疾患併存患者の増加などによる医療の在り方の変化等を踏まえて、医療者としての根幹となる資質・能力を培い、多職種で複合的な協力をを行い、多様かつ発展する社会の変化の中で活躍することが求められるとしています。さらに、患者様やご家族様の価値観に配慮する観点や利他的な態度が重要であるとも強調されています。つまりは、情報を的確にとらえながら、常に多様化する社会に適応でき、コミュニケーション能力に長けた人材が求められているということになるかと思います。

さらに、診療参加型臨床実習を実施する上で整備すべき事項として、「診療参加型臨床実習実施ガイドライン」が示されました。臨床実習は、学生が指導者のもとで歯科医師としてのプロフェッショナルリズムや知識・技能・態度の基本的な事項を学ぶことを目的としていることから、実際の患者様に対する診療経験を通じて、医療現場に立った時に必要とされる診断および治療などに関する思考法・対応力・実践的な技能や臨床を通じた研究意欲などを養うことであることは明白です。ここまで読み進んだ皆さんは、「新潟大学では当たり前のことではないの?」と思ったかも知れません。そうです。本学では、すでに診療参加型臨床実習が行われており、文部科学省が掲げる「臨床実習に参加する学生の適性と質を保証し、患者の安全とプライバシー保護に十分配慮した上で、診

療参加型臨床実習を更に促進することが求められる」を達成していると言っても過言ではありません。社会の動向の変化をいち早く捉えて改革を進めてきた新潟大学歯学部における歯学教育を無事に修了された皆さんは、自身と誇りをもって、歯科医療従事者、福祉専門職として社会に羽ばたいていけるものと確信しています。

皆さんは、競争が激化している社会、そして歯科界の中においても高い評価を受けて卒業の日を迎えられました。私たちは、皆さんが設備、教員、カリキュラムなどいずれをとっても恵まれた教育資源のもとで、これからの社会で勝ち抜くために必要な知識、技能、態度が培われたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという高い誇りを胸に、大いに活躍してください。Bon voyage!





卒業を祝して

医歯学総合病院副院長（歯科総括） 多部田 康 一

歯学科54期生・口腔生命福祉学科17期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。長い期間にわたる努力を経て新潟大学歯学部の教育課程を修了し、学士の学位を取得された皆さん、そして卒業生を支えてこられたご家族、ご親族の皆様にお心からお祝いを申し上げます。

皆さんは新型コロナウイルス感染症の蔓延という前例のない困難を経験しながらも学業と日常生活を続けるための努力を重ねてこられました。現在、ワクチンの普及とともに日常生活はほぼ正常化へと至りつつあります。ただ同時にパンデミックがもたらした影響はとて深刻なものであったことを忘れてはならず、多くの人命が失われたことも事実です。世代や立場、価値観の違いによる意見の違い、そこに生じる精神的なストレスも経験しました。これから歯科医療や社会福祉の分野で活躍する皆さんにとっては忘れることのできない貴重な学びの期間でもあったと思います。また、歯科医学教育、歯科医療の現場においては、改めて標準予防策の重要性を認識しました。个人防护具（PPE：personal protective equipment）の装着においては、多くの職員にとって長年の習慣を変えて適応する苦労もありましたが、これを基本として学んだ皆さんにとって、PPEネイティブとして、生涯に必要な感染対策を基本として習得したことが財産です。

皆さんはこれまで大学教育において、歯科医学、口腔保健医療・福祉学の重要な知識と基本技

能の習得という不変的な土台を築きました。今後は現場での経験を積みながら学び続けて、成熟したプロフェッショナルへと成長してゆかなくてはなりません。優れた良き医療人として活躍し、社会に貢献してゆくために、自己研鑽の努力が必要です。その自己研鑽においては心身を損なわない程度に、しかし、少し重めの負荷をかけて欲しいと思います。この成長する時期に、積極的に学ぶことに皆さんの時間投資をしてください。近年のコミュニケーションスタイルの変化においては、皆さん自身が自律的に学び創造性を発揮する環境を重視します。目的の達成や成長のための外的なドライブフォースは無く、皆さん自身が目標を設定し、自己の評価を行い、怠ることなく努力をしてゆかなくてはならない時代と思います。

新潟大学歯学部の卒業生には、常に高い志を持ち続けてください。皆さんが各々の分野で専門職業人として社会に貢献することを基本として、現在の医療技術や医療・社会福祉システムの改善、発展、さらには新たな創造も目指していただきたいと思います。若さと積極性を活かし、既成概念に囚われない発想と挑戦が、個人的な成長を超えて社会全体のイノベーションを促進することに繋がります。おおよそ5年後や10年後の具体的な目標を設定して時間を有意義に使い、自己実現とともに社会貢献されることを願います。新潟大学歯学部・医歯学総合病院の教職員一同、皆さんを応援しています。

卒業生のことば

卒業の言葉

歯学科6年 早川杏梨

時が過ぎるのは早いもので、新潟大学に入学してから5年半がたちました。臨床実習も終わりを迎え、今は来年1月の歯科医師国家試験に向けて日々必死に勉強する毎日を送っています。この5年半とても多くのことがあり、楽しいことだけではなく辛いことも多かったのですが、今回歯学部ニュースを執筆する機会をいただいたので、今までの大学生活を振り返っていきこうと思います。

まず私が印象に残っているのは3年生のときのクラウンブリッジ実習です。模型上で歯を切削したり、TECを製作したり、石膏模型を製作し咬合器に装着したり等、歯科の臨床にあたって基礎的な技工操作、臨床操作を一通り経験させていただきました。初めてのことでとても難しく、あまりの出来なさに泣きそうにもなりました。しかし、先生方の丁寧で分かりやすい指導や友達の支えのおかげで、なんとか乗り越えることができました。当時は、終わらせなければならない事項をただ焦りながら機械的にこなしていましたが、臨床実習を終えた今、このクラブ実習がどれだけ実際の臨床実習に役立ったかを身に染みて感じています。

そして何よりも印象に残っているのは、去年の10月から約1年間かけて取り組んできた臨床実習です。はじめの引継ぎ期間は、先輩方が学生なが

らしっかりと患者さんに向き合い、丁寧に診療を行っている姿を見てただただ圧倒されていました。そして、実習で技工操作や臨床操作がとても苦手だった私は、先輩方のように診療が行えるのかとても不安になりました。引継ぎ期間が終わり一人での臨床実習が始まると、教科書や模型上の練習だけでは学べない知識や臨床での実際の手技など、たくさんのことを学び経験させていただくことができました。臨床実習では先生方の診療見学もたくさんしましたが、その経験を通して臨床に関する知識や技術はもとより、医療従事者としての心構えなどたくさんを学ぶことができました。臨床実習を終えた今、私たちのために快く協力して下さった患者さん方、診療の支援をしてくれた同級生、熱心に丁寧に指導して下さった先生方等、臨床実習を行える環境を整えて下さった全ての方々への感謝の気持ちでいっぱいです。この貴重な経験を今後の歯科医師人生にも役立てていきたいです。



同級生と撮影 筆者：4列目右から2番目

卒業の言葉

歯学科6年 福井智子

この度、歯学部ニュースを執筆させていただくこととなりました福井智子です。卒業を前に、このように学生生活を振り返る機会を頂けたこと、嬉しく思っております。拙い文章ではありますが、少しの時間お付き合いください。

コロナウイルスによる様々な面での制限は、この6年間を振り返る上で欠かせない出来事だったと思います。ひたすらに画面上の講義を受け、友達とも会うことができない日々はどこか疲弊し、無気力になってしまっていた時期がありました。そんな状況から、もう一度しゃんとしようと思わせてくれたのは、実習科目の存在でした。様々な行動制限がある中で、安全に実習を行えるようにと、懸命に取り計らってくださる方々がいました。このことが、自分がここに何を学びにきたのか、今何をすべきなのかを見直す機会となり、今の自分につながっていると感じています。

そして、なんといっても濃い時間であったのが臨床実習でした。未熟な私達を受け入れ、いつも親切に接して下さった患者さんの方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。また、学生の立場で実習をさせていただくからこそ、得られたものが多かったと感じています。診療前にしっかりと打ち合わせを行い、考えを深めたうえで実践に臨めるというのは歯科医師になってからでは滅多にない機会なのではないでしょうか。その他にも、ステップごとに逐一フィードバックをい

ただけたりと、先生方の手厚いサポートのおかげで一つ一つの診療に真正面から向き合うことができました。目標へと向かい確実に前進している感覚が自分の中にあり、この学校・この学部で学べて本当に良かったと感じました。

最後に、この6年間を共に過ごしてくれた54期の仲間たちに感謝を述べたいと思います。臨床実習の期間を経て、皆んなとの距離が縮まったことが私の中のささやかな喜びでした。こんな風に言葉にすることはあまりないので、照れくさいですね。勉強に息詰まってしまった時は、臨床実習最終日に皆んなと組んだ国試合格祈願円陣を思い出して頑張りたいと思います。頑張る姿で刺激をくれた人、辛い時に励ましをくれた人、悩んだ時に一緒に考えてくれた人、何でもない日を共にして笑顔してくれた人、皆んな、本当にたくさんありがとうございます！

これからも、より一層精進してまいります。お読みいただきありがとうございます。



臨床実写終了時 筆者は最前列右から4番目

卒業生の言葉

歯学科6年 柳 館 快 利

2年次編入から早5年、いつの間にか6年生の終盤になっていました。目前のものに精一杯になりながら5年間を過ごしたため、各年が目紛しく、時間の流れの早さに驚くばかりです。また、思い返すとあの時の編入試験を受験し、あの時の面接官の先生に巡り合ったことで人生が大きく変化したのだと感慨深く思います。

5年間を振り返ると各学年で大変だった教科が思い出されます。生化学、解剖実習、クラブリ実習、義歯製作など。私は記憶力も優れず、実習も苦手という人間だったため、年々増えていく専門科目と実習が大変で、辛さが思い出になっています。他にも、授業とは別に薬理学講座にて基礎研究を学ばせていただきました。免疫沈降や骨芽細胞の培養、質量分析の見学などこれまで経験していなかった実験操作を学ぶことができました。

臨床実習が始まってからは、基礎実習とはまた違う質の難しさに直面しました。実際に患者さんの口腔内を治療させていただくため、最初は何をするにもとても緊張していたのを覚えています。私は部分担当を含めて15人の患者さんを担当させ

ていただきました。高齢の方が多く、来院が難しい方が多かったです。患者さんによってはTBIを無意味とっていたり、予定をどうしても忘れてしまう方であったり、ある理由からモチベーションが低下してしまっていたりと背景は多様で、患者さんを考えるという難しさを痛感しました。臨床実習が始まる前までは手技や知識にばかり目が行きがちでしたが、患者さんを相手にするのは必ずしも治療内容の心配だけではないと感じました。特に来院の調整は大変で、当初はメンテ月の調整のみでしたが、メンテ月に来院できなかった患者さんが増えていき、また体調により来院日が決まる方もいらっしまったため、日を追うごとに電話をする機会が増えていき、気がつけばいつも電話していたように思います。それ故に、患者さんと話す機会が多く、ラポールが形成されていくのが感じられました。大変な臨床実習でしたが、患者さんとコミュニケーションを取るのが楽しかったです。

最後に、あっという間の新潟生活でしたが、全てが貴重な経験となりました。この経験は今後生きていく上で必ず役に立つと思います。そして、これまで巡り合った友人、先生方、その他多くの方、今後出会う方々を大切にこれからも一生懸命チャレンジしたいと思います。



最後の総診連絡会にて 筆者3列目右から3番目

卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 菅原 笙子

口腔生命福祉学科への入学からあつという間に4年が経ち、卒業を迎えようとしています。改めてこの4年を振り返ってみると、入学式はなく授業もオンラインでした。同期がどんな人たちが全然分からない不安でいっぱいの状態から、旭町キャンパスでの大学生活がスタートしたことを思い出します。「学年が上がるにつれて忙しく、4年生が一番大変」と言う話は聞いていましたが本当にその通りで、特にこの1年は臨床実習や福祉実習と並行しての就活、特論、国試勉強など、身体的にも精神的にも想像以上に大変な1年間でした。

病院実習が始まった当初は座学や基礎実習、相互実習で学んだこととのギャップに戸惑ったり、自分自身の未熟さを痛感したりすることがほとんどで、1日中気を張った疲れから帰りの電車で寝過ごしたこともありました。それでも実習を重ねていく中で褒めてもらえることが増えたり、患者さんから「頑張ってるね」と応援してもらえたりと嬉しかったこともたくさんありました。病院の先生方や歯科衛生士の皆さん、同期の仲間たちに助けられながら最後までやり遂げることができて今は達成感でいっぱいです。

福祉実習では新潟市社会福祉協議会で実習させていただき、講義だけでは分からない現場での経験をたくさんすることができました。また、地域

の方とも交流する機会が多くあり、地元の魅力を再発見することができました。優しい職員の皆さんにいろいろなことを教えてもらって本当に充実した実習期間でした。将来は福祉の分野に進むので、実習で学んだことを生かして一人一人に向き合える社会福祉士になりたいと思います。

最後になりますが、私が充実した4年を過ごすことができたのは先生方をはじめお世話になったすべての方々のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。特に同期のみんなには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は17期生のみんなが大好きです。個性が強い人ばかりで、毎日教室がにぎやかで、卒業して離れるのが本当に寂しいです。楽しい大学生活にしてくれて本当にありがとう。大学で学んだことを生かして少しでも自分の目指す社会福祉士像に近づけるように励んでいきたいと思っています。



実習最終日に撮影 筆者最後列中央

卒業にあたり

口腔生命福祉学科 4年 瀧澤 侑加

口腔生命福祉学科に3年生から編入学し、この2年間で振り返ってみると新たな挑戦や成長の機会になったと感じます。

3年生では新型コロナウイルスの影響で一部オンラインでの福祉の講義を受けました。現役生とは異なるカリキュラムで空き時間も多かったため、今しかできない新しいことに挑戦したいと考え、口腔生命福祉学科の先生方から紹介していただいた福祉関連のボランティア活動に積極的に参加をしました。低所得世帯の子どもに勉強を教える学習支援ボランティアや児童相談所で一時保護された子どもとふれ合うボランティアなど、今までに経験したことのない貴重な活動ができました。この活動を通して身近に複雑な課題を抱えている子どもたちが想像以上に多いことが分かり、自分自身も成長につながったと考えます。多くの人々に出会い、様々な考え方や新しい価値観を得ることができたため、勇気を出して活動に参加して本当によかったです。

4年生になると大学病院での臨床実習が本格的に始まりました。この臨床実習は編入学にとって2度目の実習となりますが、新潟大学病院は特定機能病院ということもあり、これまでに見たことのない多くの症例を学ぶことができました。最も印象に残っていることは摂食嚥下リハビリテーション科での実習です。病棟やICU、在宅等にも出向き、個人の状態に合わせた食事の楽しさや口

腔ケアの重要性を伝えていくことが大切であると学びました。実習の中で、患者さんが口から食事をとれた瞬間に「おいしい」と言って涙を浮かべている姿を見て胸に迫るものがありました。普段私たちが行っている「食べる」という行為は、誤嚥性肺炎をはじめ、様々な疾患や障害を抱えた方にとって決して当たり前ではなく、食事は生きがいや喜びの一つであると再認識することができました。臨床実習を通じて口腔生命福祉学科の仲間とも関わる時間が増え、より良い関係性を築くことができました。実習に加え就職活動、卒業論文、国家試験勉強が並行して行われたため今年は特に忙しく、選択に悩むことの多い日々だったと感じます。しかし、同じ学科の仲間や先生方がいつも親身に相談に乗ってくださり、一つ一つ乗り越えていくことができました。

今後も口腔生命福祉学科で学んだことを忘れず、ダブルライセンスを活かして地域に貢献できるよう、成長していきたいです。



筆者は中央、編入生5人で実習後半時期に撮影

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

歯科麻酔学分野大学院4年 沢田 詠見

同じ大学院生活でも分野によって特色があると思いますが、今回は歯科麻酔学分野についてご紹介します。

1年目は臨床がメインで、全身麻酔法や静脈内鎮静法の方法、ペインクリニック、全身疾患の知識、麻酔管理などを学びます。覚えることが沢山あり、毎日が一瞬で過ぎ去る程、忙しく感じていました。2年目以降は週に1回臨床、1回出張、他研究日となり、本格的に研究が始まります。当分野の研究テーマは、口腔顔面領域の痛みについてであり、私の研究は、下歯槽神経の神経障害性疼痛モデルマウスを作製後、延髄に人工シナプスオーガナイザーを投与し、一次中継核におけるシナプス形成が末梢神経の感覚の回復にどのような影響を与えるか解明するという研究です。先行研究がなく、試行錯誤しながら、様々な技術を一つひとつ習得していくしか方法がなかったため、とても過酷でした。他分野や他学部の先生方に助けをいただきながら、なんとか形になりそうです。また、中国からの留学生と縁あって同期になり、日本にいながらも外国の文化や言語を学ぶことができました。研究も臨床も、細く長く続けていこうと思いました。

臨床と研究をどちらも経験することができましたが、臨床では、同じ麻酔方法でも患者さんごとに麻酔管理や薬剤や薬剤量が異なり、その都度計

算が必要で、そこが難しいところではあります。が大変面白く、好きなところ。歯科治療においても、既往歴のある患者さんへの対応や患者さんに何かあった時に、対応するための全身管理学を学ぶことができ、価値のある4年間でした。

楽しいことばかりではなく、つらいことや大変なことの方が多かったですが、この4年間の中で、自分に良い影響を与える素晴らしい方々に出会うことができました。そのおかげで、大学院へ進学してよかったと思います。大学院生活で身についたものは、忍耐強さと冷静さです。人の苦しみや痛みはその人自身にしか分からないので、少しでも患者さんの気持ちに寄り添える医療従事者でいたいと思います。最後になりましたが、4年間で指導をいただきました瀬尾教授はじめ歯科麻酔学分野の先生方、お世話になった先生方にこの場を借りまして、心より御礼申し上げます。



歯科麻酔学分野同期留学生と研究室にて（筆者：左）

大学院修了にあたり

歯周診断・再建学分野 4年 那 須 優 介

こんにちは。歯周診断・再建学分野、大学院4年の那須優介と申します。私は49期生として本学を卒業後、研修医を経て大学院に進学しました。大学院修了にあたり、これまでを振り返ってみたいと思います。

歯周診断・再建学分野では、大学院在学中に「日本歯周病学会認定医」を取得できるような体制が整っており、高橋直紀准教授のご指導のもと、歯周治療の基本から専門性の高い治療に至るまで幅広く経験させていただきました。歯周外科手術も数例執刀したほか、出張先では多部田康一教授と2人で診療を行う機会があり、贅沢にもすぐ隣で直接ご指導いただきました。歯科医師として駆け出しの時期にこのような環境で研鑽を詰むことができ、本当に良かったと思っています。

研究は口腔生化学分野にて、照沼美穂教授よりご指導いただきました。照沼教授は、サッカー一部OB会のご縁もあって快く研究指導を引き受けてくださり、研究について一切無知な私に一からご指導くださいました。初めは大変でしたが、照沼教授をはじめ研究室の先生方、先輩方が親身に教えてくださり、次第に一人で実験ができるようになっていきました。ときに研究には大変な時間と労力が求められますが、例え些細な発見だとしても、この世で誰も知らなかった現象を発見したときの高揚感は、何物にも代えがたいものです。また、得られた研究成果を学会発表するため、愛知、

山梨、兵庫、沖縄、カナダなど色々な所に行かせていただきました。そしてその先々で、歯科の垣根を超え様々なバックグラウンドをもつ先生方と交流し、同世代の研究仲間も多くできました。これも、大学院生活で得られたかけがえのない財産の一つです。

大学院の目的は「博士号」という肩書きではなく、それを取得するための過程にあります。その過程で、臨床スキルだけでなく、物事の本質を見極める思考力、考える習慣が身に着きます。一つ一つの医療行為の背景には膨大な数の研究の蓄積があります。医療の発展につながる新たな発見や研究成果の価値を、正しく理解するための考え方や知識は、実際に研究をしてみることでしか得られません。そしてそれは、質の高い歯科医療の実践に必ずつながると思います。

最後に、大学院修了にあたりご指導を賜りました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。大学院での貴重な経験を活かして、これからも精進していきたいと思っています。



留学中の先輩と（右が筆者）

令和5年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名（9月修了者）

博士の専攻
分野の名称

氏名（専攻）

博士論文名

（課程修了 5人）

博士（歯学）	HNIN YU LWIN （口腔生命科学）	Soybean peptide inhibits the biofilm of periodontopathic bacteria via bactericidal activity （大豆ペプチドは殺菌的作用により歯周病原細菌バイオフィーム形成を阻害する）
博士（歯学）	大久保 明 （口腔生命科学）	Chewing well modulates pharyngeal bolus transit during swallowing in healthy participants （よく噛むことは健常者において嚥下中の食塊咽頭通過を変調する）
博士（歯学）	後藤 理恵 （口腔生命科学）	Effect of inhibition of salivary flow on masticatory behaviors in healthy humans （健常者において唾液分泌抑制が咀嚼行動にもたらす影響）
博士（歯学）	SUWANARPA Ketsupha （口腔生命科学）	Can masticatory performance be predicted by using food acceptance questionnaire in elderly patients with removable dentures? （可撤性義歯を装着した高齢患者において、食物摂取質問票を用いて咀嚼能力を予測できるか？）
博士（歯学）	NYEIN NYEIN CHAN （口腔生命科学）	Cholesterol Is a Regulator of CAV1 Localization and Cell Migration in Oral Squamous Cell Carcinoma （コレステロールは口腔扁平上皮癌におけるCAV1の局在と細胞遊走能を制御する）

（早期修了 1人）

博士（歯学）	中嶋 優太 （口腔生命科学）	Atropine facilitates water-evoked swallows via central muscarinic receptors in anesthetized rats （麻酔ラットにおける中枢性ムスカリン受容体を介したアトロピンの水誘発嚥下の促進効果）
--------	-------------------	--



臨床研修修了にあたり

臨床研修終了にあたり

Aコース臨床研修歯科医 菅 沼 雄 大

この度、歯学部ニュースを執筆させていただきます。Aコース歯科研修医の菅沼雄大です。拙い文章で恐縮ではございますが、少しの間お付き合いしていただければ幸いです。

さてこれを執筆しているのは11月ではありますが、新潟もすでに冬の装いとなり、あの辛かった国家試験から1年が過ぎ、研修も残すところあと少しだと考えると、本当にあっという間の1年間だったなと感じています。研修が始まった4月、藤井先生が「もうジングルベルの音が聞こえてきます」とお話しされていましたが、気がついたら本当にそんな時期になってしまいました。

あっという間の1年間でしたが、歯科医師としての人生を歩き始めた期待と同時に不安なことばかりでした。Aコースでは20人ほどの患者さんを担当させていただき、1人1人に合った治療計画を立案し、診療を行います。最初は自分たちで診療をできるのか不安でしたが、診療のステップごとに指導医の先生が確認してくださり、修正すべき点がある場合にはその都度丁寧に教えてくださったおかげで、診療を重ねるごとに自信が付き、着実にできることが増えていく実感を得られました。診療後も指導医の先生よりフィードバックをいただくことで、次の診療へとつなげることができました。Aコースでは指導医の先生方と接する機会が多く、日頃から患者さんの治療に関する相談などをしやすい環境にあり、同期の研修医とも意見交換をできるため、いろいろな人の意見

を取り入れたより良い治療方針を立てることができました。

また1年間を通して同じ患者さんを担当させていただくことで、一口腔単位での治療方針を考え、治療に臨む良い経験となりました。むし歯やかぶせ物の治療はもちろん大切ですが、治療がすべて終わった後の口腔内の状態を維持するための口腔ケアも歯科医師の大切な役割の1つです。担当させていただく患者さんの中には治療がすべて終わっている方も多く、その方達の口腔内を健康な状態に保ち、より良い信頼関係を構築することも自分たちの目指すべきところだと実感しました。

この1年間で治療に関する手技だけでなく、1人1人にあった治療方針や患者さんとの接し方など多くのことを学ぶことができました。こんなに多くのことを学ぶことができたのは、藤井先生をはじめとする歯科総合診療科の先生方、同期の研修医、関わってくださった皆さん本当にありがとうございました。これから歯科医師としてこの濃い1年間に忘れずに精進して参ります。



筆者後列右

研修医修了にあたり

Bコース臨床研修歯科医 小林 優 佳

この度執筆を賜りました研修歯科医師の小林優佳です。研修プログラムBで現在研修中です。プログラムBは、新潟大学の専門診療科と協力型研修施設で半年間ずつ研修するコースです。私の場合、4～9月は長岡赤十字病院の歯科口腔外科で、10月からは新潟大学の組織再建口腔外科にて研修を積ませていただいております。

前半の研修先の長岡赤十字病院では、周術期口腔管理や、外来患者さんの口腔外科処置、全身麻酔下での手術の助手、たまに一般的な歯科治療など様々な経験をさせていただきました。長岡赤十字病院での業務は多忙を極めており、目まぐるしい速さで患者さんを診察していきます。新患日は午前中だけで20人ほどの日もあり、困っている患者さんの多さに身の引き締まる思いでした。

私は臨床実習で抜歯の症例がなく、一度も口腔外科処置の経験がない状態でのスタートで、研修初期はコツがつかめず、このままずっと抜歯ができないんじゃないかと思い悩む日々でした。しかし、指導医の先生の丁寧なご指導の下、着実にレベルアップできたように感じております。難抜歯や水平埋伏智歯抜歯をたくさん経験することができ、自信をもつ

て患者さんに臨むことができるようになりました。

後半の組織再建口腔外科での研修は、前半学んだ口腔外科の知識や手技を用い、抜歯や手術の助手、入院患者さんの管理をさせていただいております。手術は何度も助手に入ると、次に何の操作を行い、そのために何の器具が必要か、どう鉤を引くと術者が見やすいかが少しずつわかってくるので、自分の成長を実感しています。抜歯の症例もたくさんもらえているので、今後は無駄な操作をせず確実に抜歯するにはどうしたらよいかを考えながら取り組みたいと思います。

私の研修1年間は口腔外科をしっかり学ばせていただきました。口腔外科で必ずと言っていいほど行う切開・剥離・縫合などの外科基本手技は、どの治療においても重要で、それを習得できる環境に身を置けたのはすごく恵まれてると感じております。怒涛のように過ぎ去っていった研修期間でしたが、すべての経験は血肉となっていると実感しております。

今後も続いていく歯科医師としての人生ですが、最初の1年はものすごく意味のある重要な期間であったと思います。ご指導いただきました先生方、研修先の方々への感謝を忘れず日々勉強し、邁進していく所存です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。



協力型施設の長岡赤十字病院にて 著書は前列中央

翌春に向けて

歯学部生の活動～翌春に向けて

歯学科1年 芝野智果

入学してから半年以上が経ち、歯学部ニュースを執筆する機会を頂きました。歯学部生の活動といってもまだまだ本格的な勉強は始まっておらず、学部内での交流の機会も多くはありませんが、皆様に私たちの様子をお伝えできればと思います。

有難いことに、今年は新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着き、日常に戻りつつある中での入学となりました。コロナ禍で人との交流を制限された学生生活や受験期を経て入学してきた私たちは、どこか久しぶりの人との交流に戸惑いつつ、期待に胸を膨らませソワソワしていたことを今でもよく覚えています。授業も基本的に対面となり、1限からの授業に疲弊しつつも友人と会える毎日を楽しむ日々を送っています。そんな中、私が入学してからこれまでに印象的であった出来事について紹介したいと思います。

前期に行われた早期臨床実習は、今年から実際に病院内で行う実習が再開となりました。主に、6年生の先輩方に治療をしていただく患者役実習と、各診療科を見学させていただく治療見学実習を行いました。治療を行う先輩方の姿に将来の自分を重ね、大いに刺激をもらい、各診療科ではこんなにも歯科で様々な治療が行われていることを実際に目で見て、一生懸命メモを取りながら多くの学びを得ることができ、大変貴重な経験となりました。まだ歯学の勉強をしていない私たちにとって、大きなモチベーションとなりました。落ち着いたとはいえコロナがまだ完全に収まっていない中、私たちの学びのためにご協力くださった患者様、ご尽力くださった先生方に本当に感謝い

たします。

また、今年は4年ぶりとなる歯学部運動会が開催されました。初めて聞いたとき、大学生になって運動会があるのかと驚きましたが、各学年おそろいのTシャツとはちまきを身に着け、全力で取り組む姿はとても楽しい記憶として残っています。入学してからほとんど全員で集まる機会はなかったため、学年内、そして学年を超えた交流を深める場となりました。私は運動会では看板係となりました。運動会を経験したことがない先輩方も多く勝手がよくわからない中、私たちの学年はリーダーを中心に、下絵を描いてくれた人、看板係ではないのに手伝いに来てくれた人などみんなの協力で、満足のいく絵を完成させることができました。五十嵐から旭町に通わなければならない人も多かったのにも関わらず、みんなが協力して一生懸命取り組んだこと、1位に選ばれず悔しかったことも、とても良い思い出となりました。

1年生も残りわずかとなった今、先輩方に2年生以降の学業の大変さを伺う度に、来年度の自分を想像して不安を抱きながらも、目の前のことに精一杯取り組み、充実した日々を送っています。今年度の新たな出会い、新たな学びを大切に、みんなで協力し合い、来年度以降の勉強や学生生活に励んでいきたいと思っています。



歯学部運動会にて 筆者2列目左から2番目

歯学部生の活動

歯学科1年 田邊 魁

紅葉していた木々の葉も徐々に落ち、外の空気も冷たくコートが手放せなくなってきました。日の入りも早くなり、新潟特有の曇天の雲が垂れ込む日々が続く、冬の気配の到来とともに、「今年ももう終わりかー」という哀切と安堵が入り混じる複雑な面持ちです。年齢とともに加速度的に一年の経過が早まっており、その実感に焦りつつも、それだけ日々が充実していると感じています。さて、歯学部生の活動ということで執筆の機会を頂きましたので、拙い文章で恐縮ですが今年度を振り返りつつ綴らせていただきます。

1年生は一般教養科目を受講すべく、日々五十嵐キャンパスに通い、他学部の学生とともに講義を受けています。基本的に希望通りに授業を組むことができ、空きコマも自由に作れるので、勉強に部活にバイトに恋に、皆それぞれ充実した日々を送っているようです。一般教養科目ということで、文系理系問わず多種多様な講義が受けられるわけですが、全学ならではの講義に興味に任せて受講しました。「平和を考える」、「教養を考える」、「ピアノ」、「平和と現代のグローバル安全保障論」、「中東イスラーム言語文化入門」などなど、今後おそらく関連した授業を受けることはないように思いますが、幅広い知識に裏打ちされた教授の講義は大変面白く、知的探求心をくすぐられつつ、知識の集積にとどまらない考えることを主体

とする授業形態により、一人で本を読んでいるだけでは得ることができない貴重な経験ができたように思います。2年生以降は専門科目が目白押しなのですが、役に立つかどうかという視点で学ぶだけではなく、役に立たないからこそ役に立つ、すぐには役に立たないだろうけれども学んでみるといった姿勢でおもしろがって勉強し、得た知識をひけらかすのでは無く、その知識を基に、解答のない難しい問いに対して「では自分はどうか考えるのか」という思考過程を大切にしていきたいと思います。

さて、大変地味な学生生活を送っているのですが、これといって取り立ててご報告することも無いのですが、今年は新潟駅前で素敵な居酒屋を見つけようと自主的に活動してまいりました(20歳は優に超えております)。食べログなどの評価サイトに頼らず、自分の嗅覚を頼りにストイックに探し求めてまいりましたが、先月ついに見つけてしまいました。一見独りでは入りづらい歴史を感じる佇まい、カウンター席を中心としたこぢんまりとした店内は雰囲気がとてもよく、笑顔が素敵な老夫婦が営んでおりました。新潟全域から取り寄せられた豊富な日本酒の品揃え、ひと手間加えられたこだわりの酒の肴に舌鼓をうちつつ自然と笑みがこぼれる、2023年個人的ハイライトの瞬間でした。今後もお世話になります。

最後になりますが、こんな私をいつも支えてくれる家族、優しく接してくれる同期、先生方すべての方々に、この場を借りて感謝申し上げます。今後ともよろしく願いいたします。

翌春に向けて

口腔生命福祉学科1年 昆 ゆうり

新潟大学に入学し、もう既に半年が過ぎました。最初は地元を離れての生活に寂しさを感じたり、家事を全て1人でやることに苦労したりしました。しかし、見ず知らずの場所を開拓してみることや、新しい友達と一緒にご飯を食べに行くことに楽しみを見出して、今は楽しい日々を送っています。

私は一学期に、英語の授業の単位を免除する為にTOEICで730点をとれるように沢山勉強をしていました。なぜ取ろうかと思ったかということ、私は大学院に行こうと考えているので、そのためにつかう教科である英語を自分で勉強する習慣を付けておきたかったからです。大学院での研究では、最先端の情報に触れなければならないので、海外で書かれた資料を読むためにも英語は必要だと思います。また、TOEICを受けることで自分のレベルを知ることができる上、将来就職する際に役立てることが出来ます。これを大学1年生の早いうちに挑戦することが出来て良かったです。大学受験を終えてから勉強を全くしていなかったため、集中力が続きませんでした。大学の勉強スペースや図書館に通いながら、勉強を頑張りました。7月に受けて結果は無事750点を取ることができました。この結果に満足せず、これからも勉強を続けて行きたいです。英語系のサークルにも参加してみたいと思います。

1年生は基本的に五十嵐キャンパスで授業を受けます。五十嵐キャンパスでは、他の学部の人と関わる機会もあります。授業の中でのディスカッションでは、学部に基づいた考え方を聞くことが出来ます。学食の会場は3箇所あり、出来たての温かいご飯を食べられます。

1年生の1学期に行われた早期臨床実習では、実際に大学病院に行って見学させてもらうという貴重な体験をさせてもらいました。最初は、朝早く起きて行くのが大変でしたが、それ以上に学べることが沢山あり、自分も早く歯科衛生士として働きたいという気持ちが強まりました。私が特に印象に残っているのは、1人の患者さんに対して沢山の人が関わっているということです。患者さん自身でも自分の痛い場所が曖昧な時でも、様々な専門分野の歯科医師が話し合いながら、その原因を突き止めようと一生懸命になっていました。グループディスカッションでは、歯学科の方とグループになって実習で学んだことから疑問点を洗い出し、それについて自分たちで調べて発表する準備をしました。私の班では「予防歯科の今と昔」というタイトルで発表をすることになりました。自分たちでコミュニケーションを取りながら構成を考え、発表しました。他のグループの発表を聞く時も様々な研究や考え方が聞けて、有意義な時間でした。

2年生になると本格的に専門教科の勉強が旭町キャンパスで始まります。歯科衛生士になるために着実に知識をつけていき、仲間と協力し合いながら頑張っていきたいです。

歯学部生の活動

歯学科2年 大橋 薫

強烈な夏の暑さが和らぎ涼しい日も増えてきました。この原稿を書いている現在、二年生になってからはや半年が経過しようとしています。九月の前期試験を終え、少しホッとしています。二年生になって編入生の新しい仲間が増え、授業内容も専門性が増して、歯科医師を目指して勉強していることを実感する瞬間が多くなってきました。始まったばかりの四月ごろは、それまでの五十嵐キャンパスでの授業や生活とは大きく異なった環境に戸惑いも多くありました。時間割はみっちりであることに加え専門的な勉強に慣れていくのは大変でしたが、友人たちと助け合って試験を乗り越える日々でした。これまでの出来事を振り返りつつ、来春に向けての抱負を述べたいと思います。

学校行事に関して言えば、五月には一から六学年そろっての歯学体がありました。コロナ禍で最近では開催されていなかったそうですが今年は開催されたおかげで準備や運営を通して学年の親睦も深まったと思います。玉入れ、パン食い競争、綱引き、リレーなどなど涙はありませんでしたが笑いにあふれた歯学体でした。

行事だけでなく、個人的には昼食時にクラスメイトと勉強に関するだけでなく他愛もない日常会話の時間が増えたことをとてもうれしく思っ

ています。一年生の頃は人によって選択する授業が色々だったので一部の人と限られた時間でしか交流がありませんでしたが、二年生になってそれまで話したことがなかったクラスメイトとも親睦を深めることができます。

後期からはグループワークや発表などの機会が増えると聞いています。九月の試験を通して学友間での情報交換や教え合いが大切だと改めて気づかされました。後期の授業でも勉強に対する意識を高く保ちながら周りとは切磋琢磨して励みたいです。

また、歯学部ニュースの中で言及されている先輩方がいらっしゃいましたが、三年生になると解剖学実習が始まり、二年で学んだ内容が頭に入っていることが大事だということなので、ただ試験に合格することを目的とするのではなく先を見据えた学習を進めていきたいと思います。二年生になった現在、学んでいる科目は基礎的なものがほとんどですが、この基礎の学びがこれから先のさらに専門的な歯科に関する学びや国家試験などに生きてくることははっきりとわかっています。座学が多い今の勉強が将来歯科医師としてどのような場面で役に立つのか想像しながらモチベーション向上を図りたいです。そのために、授業を受けるにあたって予習と復習にしっかり取り組み、充実した今後の学校生活を送りたいです。さらに、勉強だけでは視野が狭くなってしまうのでクラスメイトとの交流や学校行事にも全力で向きあうことで人間性も磨きながら成長していきたいです。

歯学部生の活動

歯学科2年 高山良太

この春に2年に進学し、忙しく生活する中で早くも後期を迎えています。この半年間で大学生活は大きな変化を迎え、多くの方がより一層学習や部活動、アルバイトに励んでいます。2年での授業はより深く専門的で、将来につながる学習だと実感する内容がほとんどになってきました。更には新型コロナウイルスの対策が緩和され始め、様々な行事が再開されたりや日々の行動制限が無くなったことで、より充実した生活を送れていると感じます。

そんな半年間の中で、最も大きな出来事と言えば、前期の定期試験だと感じています。前期の定期試験は、春からの授業を試験範囲として、夏期休業明けに行われました。夏期休業が明け、久しぶりに友人に会うと、「休業中も試験のことが頭を離れなかった」という人や、「試験勉強がなかなか進まなかった」という人が、自分も含め多くいました。夏期休業を心の底から満喫できた人は少ないのではないかと思います。しかし、休業明けから試験期間までの間、試験期間中も含めて夜遅くまで図書館や、自習室などに集まって同級生で協力し合いながら試験勉強をしていました。そ

れぞれが同級生の勉強法を参考にしながら協力して学習する姿が印象に残っています。

なんだかんだ定期試験は終了しました。後期になり、前期に比べて暇になるかなと少々期待していましたが、そんなことはありませんでした。前期は毎週提出しなければならないレポートが少なかったのに対して、後期は実習などで提出課題が増え、課題に取り組む毎日になっています。前期の学習で忘れてしまった内容などは補填しながらレポートを作成しなければいけないため、かなりの時間がかかってしまっています。レポートは大変ですが、実習を行う中で、自然と学年内のいろいろな人と話す機会が増え、同級生間での意見交換や交流が活発になったように感じます。多くの人とコミュニケーションを取ることが出来て、私も楽しく過ごせていますし、学年にとっても良いことだと思います。

さて、残りの2年生の期間も課題や試験などに追われながらあっという間に過ぎ、来春からは3年生になります。2年生では基礎系の科目が中心となっていますが、3年生からは専門科目が多くなり実習も増えます。2年生で得た知識は3年生でも必要となりますし、もちろん国家試験でも使います。座学と実習を組み合わせしっかりとした知識と技能を身につけられるように今から努力していきたいと思います。

歯学部の様子～来春に向けて～

口腔生命福祉学科2年 加藤万葵

歯学部2年生になりすでに半分以上が過ぎました。来春に向けての目標を掲げるにあたり、まずはこの半年間を振り返ってみようと思います。

今年度からオンライン形式での講義が無くなり、全ての講義が対面形式となりました。今まで話したことのなかったクラスメイトと話す機会も増え、「これからこのメンバーと一緒に頑張っていくのだな」と改めて感じる事ができました。前期をこのクラスで過ごしてみて、就活も、国家試験も一人だけでは決して達成することはなく、同じ目標のために頑張る仲間存在は非常に大切だと実感しました。それを特に感じたのは前期の試験期間です。今年度から専門科目が始まり、覚えることも、難しい内容も多く、試験勉強は本当に大変でした。そんな中、重要な部分をまとめたノートを見せてくれたり、先輩から得た情報を共有してくれたりした友人のおかげで、なんとか試験を乗り越えることができました。全員で合格しよう、全員で進級しようという連帯感があり、こうした経験から、チーム医療の力が身につけていくのだと感じました。

前期の試験が終了してからは、基礎実習室、相互実習室での実習も始まりました。身だしなみ、手洗い、消毒などに気を配り常に清潔を意識する

ことで、将来医療従事者になるという自覚が強く芽生えました。スケーリング、ブラッシング指導など様々な実習を行う中で感じたのは、日頃から今までの学習内容と、実習で新たに学んだ内容の復習が重要だということです。例えばスケーリングをする際には、歯の本数や形態をよく分かっている必要があります、さらに部位ごとに使用するスクレーパーが異なるのでそれをしっかり復習しておかなければ、次の実習で大変な思いをすることになると知りました。また、お互いに術者と患者役を交代して行う相互実習では、実際に患者さんへ接する時のような言葉遣いや態度、コミュニケーションの取り方など一番大切なことを忘れがちなので、常に意識することが必要であると感じました。

以上から、来春はコミュニケーションをしっかりとる、講義や実習で学んだことを日頃から復習する、身だしなみや挨拶等の社会に出るうえで当たり前に行っていなければならないことをいつも意識する、この3つを特に頑張る必要があると考えました。また、前期ではすでに何度か欠席してしまったのですが、来年はさらに実習の回数も増え、新しいこともたくさん学ぶようになるので、1日欠席するだけでかなりの遅れをとることになってしまいます。ですので、今から体調管理をしっかり行い、来年度は無欠席を達成できるように気を配りたいです。卒業後、良き医療人となるためにこれらを常に心がけて行こうと思います。

歯学部生の活動

歯学科3年 橋本 宙

歯学部での生活も3年目を迎え、大学生活6年間の折り返し地点が見えてきました。3年生では専門的な科目の講義、実習が増え、より充実した日々を送っています。今回は3年後期から始まった実習と所属している部活動について書こうと思います。

現在、保存修復学と歯冠修復学の実習を行なっています。基本的にこれらの実習は予習前提で進み、自分で何をすべきかを考え、手を動かして実習を行う必要がありますが、実際に自分で考え、手を動かして作業を行うことの難しさを感じさせられています。私は目の前のことに集中するあまり、その作業の後に行うことを忘れ、スムーズに実習が進まず、周りの同期より遅れることがあります。実習に対してマイナスな気持ちになることもあります。その一方で製作物が正確にできた時などは達成感があります。また、実習では周りの同期からとても良い刺激をもらっています。周りの同期の手際の良さを見ていると自分に足りないものが何かはっきり見えてきて、それを意

識して実習を行うことでより良い学びになっている気がしています。刺激を貰うだけでなく、自分も与えられるように今後の実習に向き合っていきたいと思います。

部活動については私が所属するバドミントン部では夏に愛知県でオールデンタルが開催されました。新型コロナウイルス流行により4年ぶりの開催となりました。北は北海道大学、南は九州大学からと23大学の参加があり多くの学生が集まり、大会が開かれました。先輩からかなり大きい大会であるということは聞いていましたが、想像の何倍も規模の大きい大会でした。大会では日頃のバドミンントンの鍛錬の成果を発揮するとともに全国の歯科大学間の交流を深め、有意義で楽しい4日間を過ごすことができました。バドミントンというスポーツを通して大学間で刺激を与え合うことができ何より楽しかったです。

この夏のデンタルを境に幹部代が交代となり、現在は幹部の代として活動しています。来年のデンタルでの活躍を目標に日々努力しています。実習で忙しい日々が続くと思いますが、部活動に手を抜くことなく両立して今後もより充実した学生生活を送っていきたいです。



愛知デンタルにて 筆者2列目左から3番目

将来のための土台づくり

歯学科3年 山本采奈

3年生になり、口腔生化学や口腔生理学など名前に「口腔」のつく講座が増えたなと感じました。それらの講座や解剖学実習の予習・復習、夏休みに開催されるデンタルに向けた練習に取り組んでいると、あっという間に前期が終わっていました。解剖学実習の際には、私たちのために献体してくださった方とその御家族に感謝しながら、今後臨床で役立つ知識をしっかりと身につけねばという思いで臨みました。デンタルはコロナ明けの久々の開催でした。初めて他大学の歯学部生とバドミントンを通じて交流し、大学生活の情報共有をする中で新たな発見もあり、楽しい経験でした。

後期に入り専門科目が一気に増えたことで、将来歯科医師になるのだと一層強く自覚しました。授業を聞いてもすぐには理解できないことが多くなり、予習・復習の時間が自然に長くなっている気がします。歯冠修復学実習に関する事前学習や教科ごとの提出物など、毎日するべきことが多いので、自分でやることリストを作ったり、友達と確認し合ったりして忘れないようにしています。

カービング実習も始まり、ワックス棒から上顎左側中切歯の模型を再現しました。授業中では削り終わらないので、自宅で少しずつ削り、完成させました。デジタルワックスアップも含め、さらに5本の歯を作る必要があるので頑張りたいと思います。以前までは歯を漠然としか見ていませんでしたが、歯の形態学やカービング実習を通して歯の形態の特徴に注目するようになり、歯を見る視点が変わった気がします。病理学の実習ではバーチャルスライドを使って異常組織像を観察しています。バーチャルスライドなので授業時間外でも組織像を観察でき、復習に役立っています。実習が進むにつれて、基礎科目と専門科目との関連を感じるようになってきました。基礎科目で習った正常組織像や疾患の原因と関係する代謝の機序など、忘れていたことも多くあることに気づき、基礎科目を復習する必要性を感じています。今後は基礎と専門の関連を意識しつつ、総合的な視点をもって取り組みたいです。

実習が増え忙しくなってきましたが、これらは全て次年度の学習、ひいては将来患者さんにとって最善の治療を選択することに繋がるので、今が頑張りどころだと自分を奮い起こしています。辛い時は同期と協力して乗り越え、来春を迎えたいです。



下顎右側第一大臼歯のワックスアップ

歯学部生の活動～翌春に向けて

口腔生命福祉学科3年 五十嵐 清 華

月日が流れるのは早いもので、私たち18期生は3年生の後期に突入しようとしています。そこで、「歯学部生の活動～翌春に向けて」というタイトルのもと、普段の学生生活について書かせていただきます。3年に進級してからは歯科に加えて福祉の学習も始まり、PBLの数科目同時進行やさまざまなスライド作りなど、慌ただしい毎日を送っていて、コロナ禍の時には恋しがっていた対面授業ですが、今は、オンライン授業が恋しいくらいです。

さて、3年になってからというもの、私は就職について考える時間が格段に増えました。それは進級当初、先生に言われたのがきっかけです。焦りだした私は、福祉系の仕事に就きたいとなんとなく考えていたので、今年度からさまざまな活動に参加するようになりました。まず始めたのは、社会福祉協議会が行っている子ども勉強会の「大学生サポーター」です。これは、貧困世帯の子どもを対象に、個別的に勉強を教えるのですが、休憩中に学校の話や趣味の話をしてくれるのでとても楽しいです。次に始めたのは、児童相談所の一時保護のボランティアです。ここでは、一時保護されている子どもたちと一緒に遊ぶなかで、相手のことを傷つけない声掛けを教えたり、大人と子

どもの間である大学生にだからこそ話してくれることを聞いたりしています。繊細な子が多いので大変ですが、同時にやりがいもすごく感じることでできる活動です。このほかにも知的障害をもつ子と一緒に体操や料理をするボランティアなどにも参加しました。知的障害といってもさまざまな種類があり、活発な子からおとなしい子までいろいろな子がいて、もっとこの子達について知りたいと思うことができました。

また、最近は歯科医院でもアルバイトを始めてみました。歯科衛生士の現場での役割や、閉院後の教え合いなどを見ていると、歯科衛生士も魅力的な仕事だと感じました。

このような活動を通して、歯科や福祉の現場を少し知ることができました。しかしながら、そこで見てきた現場の方々には明るくポジティブで、「自分とは違う」と自信をなくしてしまい、余計就職先に悩んでしまいました。そんな中でも、同じ悩みを抱えた友達や、不安な気持ちをすべて受け止めてくれる優しい先生がいることにも気づきました。

後期には、大学病院での臨床実習や福祉施設での現場実習が控えています。不安でいっぱいですが、そのような周りの力を借りて、来春、本格的に始まる「就職活動」に向けて、たくさんの経験を積んで自分にとって最善の道に進めるよう精進していきます。残り1年半の大学生活を楽しむことも忘れずに！

歯学部生の活動～翌春に向けて

歯学科4年 向井光優

歯学部に入学してから既に3年が経過し、4年生も残り半分を切っている。入学してから現在までのことを振り返ると、1～3年生までは人体の構造や歯科材料の組成や特徴など基礎的な内容を学習していたが、4年生になるとほぼ毎日臨床に即した内容の勉強をしている。講義では複数の症例が取り上げられ、それぞれの臨床症状や実際に行われた治療法などの説明を受け、グループディスカッションの時間では、与えられた症例について班員と話し合いながら最適な治療法は何か考えている。実際に治療法など自分の頭で考えることで、講義で得た知識が整理され、少しずつではあるが定着してきているように感じている。

さて4年生の後期に突入し、最も苦勞していることは週4日の実習である。夏休みが終わると矯正学実習や歯周病学実習、歯内療法学実習、欠損補綴学実習（部分床義歯やブリッジを製作する）などさまざまな分野の実習が始まった。実習を通して、これまで座学で学んだ知識同士が繋がっていくことを実感でき嬉しくなる一方で、毎日主体的に勉強しなければ周りに置いていかれる環境であり大変だと感じる日も少なくない。実習ではあらかじめその日の実習内容を予習しておかないと当日全く手が進まなくなるため予習は必須である。また予習をしても慣れない作業でミスをすることは多く、やり直しとなると周りの友達に後れを取って焦ったり、思い通りにできない自分

に苛立ったりすることが多々ある。しかし1度失敗することで何がいけなかったのかについてよく考えるため、注意しなければいけないことが記憶に残りやすく、とても勉強になる。1年後には臨床実習が始まるが、臨床の場でできるだけミスを減らせるように今のうちに多くの失敗を経験しておきたいと思う。

そして後半年もすれば5年生となり、5年生で待ち構えているのはCBTやOSCEである。これらは臨床実習に取り組む前に必ず合格しなければならない試験であり、5年生までの間に学んだ知識や技術がきちんと身についているかを試されるものである。先輩方がCBTやOSCEについて話している頃は自分にとってはまだまだ先のことのように感じていたが、気づけば自分たちの番となっており時の流れの早さを実感している。勉強面においても実習面においても不安なことがたくさんあるが、友達と支え合い、たまには息抜きをして楽しみながら残りの学生生活も頑張っていきたいと思う。



矯正学実習にて 筆者右から3番目

歯学部ニュース

歯学科4年 森田 壮

歯学科4年の森田壮です。大学生活も気づけば折り返しになり、来年には臨床実習で実際に患者さんを治療すると思うと、今から緊張と恐怖で鳥肌が止まりません。実習などでの自分の不器用さ等に不安を覚えておりますが、最近では成功した時より失敗した時の方が学ぶ事が多いとポジティブに捉え、マネキン相手に沢山失敗して沢山学び、来年以降に繋げていこうと思うようになりました。ただ、そんな私でも成長したと感じられることがあります。それはデンタルIQの向上についてです。歯学部に入る前、私は歯磨きも適当で、小さい頃にはよく虫歯で歯医者に通っていました。それでも歯学部に入り、う蝕学や予防学などを勉強したことで、歯や口腔ケアに対する意識というのが向上し、今では歯間ブラシ、洗口液まで

使わないと気持ち悪くて寝られないほどにまで成長しました。デンタルIQには、その人の知識や環境が大きく関わっている事を実感し、将来歯医者になった時に歯や口腔ケアに関する情報を患者さんに伝える事も重要なのだなと思いました。良い情報を患者さんに沢山伝えられるよう、これからも勉強や実習を頑張っていきたいです。



実習終わりのお疲れなみんな。
筆者は前列右から2番目



矯正実習のワイヤーベンディング中 筆者 右



遊ぶ時も全力で。筆者 前列右端

歯学部生の活動～翌春に向けて～

歯学科5年 加藤由佳

歯学部ニュースの原稿の依頼を受け、この機会に5年生の前期の振り返り、これからの私の取り組み方について書かせていただきたいと思います。

5年生に進級してから、臨床予備実習、CBT、OSCEを乗り越え、半年が過ぎました。臨床予備実習は、4年生までの学習を同期で実践という形で、模型実習より患者さんを配慮することを考えさせられました。CBT、OSCEは、歯学部に入學してから、初めての外部の試験ということで不安でいっぱい、試験当日は今でも忘れられないほど緊張しました。CBTに関しては、試験日が1か月延期となる経験をしました。社会に出てからは、学生の時と違い、すべてが予定どおりに進むといくことはないと思います。自分でどのように集中を保つか、予定外のことにどのように対応するかを考えさせられる良い経験になりました。前期を振り返ると、同期と協力し励まし合い乗り越えることが多く、改めてとても良い同期に恵まれていると感じます。周りの人を大切に、これからの臨床実習を努めていきます。

これからは、Student Dentistとして病院で患者さんを担当させていただきます。登院式の際に、新たな名札を頂き、1年生の入学時の初々しい写真と比べ、成長したと言いつつ次の日に、患者さんの引継ぎが始まりました。今までの実習とは違い、失敗は許されません。自分の準備、学習、技能のわずかな抜けが患者さんに影響します。気を引き締め、患者さんを第一に考え、行動していきます。登院してから約1か月が過ぎ、

先生方から多くの指導を頂いながら診療を行ってきました。その中で、自分の不足を痛感しました。診療の難しさを体感しました。先輩方が診療しているところを見て、私も1年後、後輩に引き継ぐまでに、一つでも多くを成長しなければなりません。自分たちの実習にご協力いただいている患者さん、ご指導いただく先生方への感謝を常にもち、1年という短い時間を、一生懸命努めていきます。

最後に、この文章が歯学部ニュースに掲載される時には、患者さんを担当し、治療をさせて頂いてから約半年が経っていることと思います。私がこの歯学部ニュースを見るとき、一つでも多くの知識、技能が自分のものとなっていると言えるように、精進していきます。



自分専用の机を手に入れました

翌春に向けて

歯学科5年 水 上 大 河

8月末、タイトルにもあります通り「翌“春”に向けて」をテーマに歯学部ニュース寄稿のご依頼をいただきました。その時点では、予期せぬ延期となったCBTが眼前に迫り、私としては翌“秋”のことすら考えられない状況でありましたが、結果としては無事に秋を迎えることができましたので、まずはこの場をお借りしてCBT・OSCEの運営に携わって下さった先生方と関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

春の見通しを立てられるようになるまで記事を寝かせておりましたところ、気付けば臨床実習が始まって1か月以上が経過しておりました。臨床実習が始まった10月は引継ぎ期間で、頼もしい先輩方に甘えながら過ごしてしまいましたが、すぐに実習生として立ち立しなければならぬようになりました。

そうしてあっという間に過ぎていった11月ですが、今振り返ると4年目（2年次編入なので）を迎える歯学部生活史上最も過酷で、心身ともに追い詰められた1か月でした。自分で組んでしまった連日の診療と、それに付随するレポートや模型での練習に追われ、外来の見学では口腔外バキュームをつけたり消したりすることしかできず、接着に使う歯科用セメントも満足に練ることができず、模型実習でできるようになったつものことが実際にはできていなかった現実を突きつ

けられ、これまでやってきたことが自分のものになっていなかった事に気付いてしまいました。

しかし記事の作成にあたって歴代歯学部ニュースを振り返りますと、これまでの先輩方も5年生になると軒並み似たような思いを経験しているようでした。私のこの1か月間の苦しみも新潟大学歯学部のカリキュラムの掌の上だったのかもしれないと思うと複雑ですが、精神面についてはある意味順当に臨床実習を進められていると考えようと思います。

ここまでを踏まえて、翌春に向けた私の目標を立てました。それは自分の現在地を再認識し、前向きに受け止めていくことです。今後も診療や見学に向けて精一杯準備して臨んだとしても、己の至らない部分や力不足を感じる機会は幾度となくやってくると思います。しかし、そこで悩んでしまう時間も心の余裕もないことがこの1か月間でよくわかりました。いちいち思い悩むようなことはせず、冷静に原因と改善策を検討して次に生かすことが必要です。このような挫折と立ち直りを春までに何回も繰り返しながら、その都度強い自分になれるよう精進していきたいと思います。そして春を迎えるころには、挫折の機会自体もぐんと減っているようになることを願うばかりです。

最後に、このような成長の機会をいただけているのは、先生方の親身なご指導と患者さんのご協力、そして応援してくれている両親の支援あつてのことです。私の臨床実習に関わってくださっている全ての方へ感謝の思いを忘れず、残り短い学生生活を実りあるものにしていこうと思います。

SCRP報告

SCRP日本選抜大会を通して

歯学科4年 西村隆之

こんにちは。歯学部4年生の西村隆之です。令和5年8月に、私は新潟大学の代表としてスチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会に出場させて頂きました。SCRPは日本歯科医師会主催で毎年実施されており、学生が英語で研究発表を行い、研究内容及びプレゼン力のクオリティを競い合う大会です。本年は17の歯科大学／歯学部の参加し、4大会ぶりの対面での発表・審査となりました。久方ぶりの対面開催であるのに加え、コロナ流行前ではポスターセッションだったものがパワーポイントでの発表となりました。

私の研究テーマは、「Canonical Wnt signaling in pre-migratory cranial neural crest cells determine their post-migratory cell proliferation in orofacial development (顔面を形成する神経堤細胞の遊走後の細胞増殖は、遊走前の神経堤細胞での古典的Wntシグナルにより決定される)」でした。

数ある分野の中で発生学を選択した理由は、顔面領域の発生メカニズムの解明は他の歯科疾患の理解を深めるためにも重要だからです。特に口唇口蓋裂は形態的先天性疾患の中でも多く、歯科口腔分野の課題の一つであり現状の侵襲的な外科のアプローチだけではなく、その解明という面でも重要になると考えます。研究の中で印象深いことでは、現在こういう報告があるから、また教科書的にこうだから、KOマウスはこうなるに違いないと考えたとしても、実際には生体であるが故に想定した結果を得られないことがありました。結果が出たらなぜそうなるのかについて思考しその内容に沿った研究方針に切り替えて実験します。未知があまりに多いがゆえに結果に振り回されま

すが、ピッタリとパズルのピースがハマるような瞬間があります。そのような小さな積み重ねが、発生過程の解明の一助になれば幸いです。

約2年の研究期間とプレゼン発表の準備を経て大会に臨みました。結果は残念ながら上位入賞には至りませんでした。短い大会期間で私は多くの成長を得られたと考えます。英語での慣れないプレゼンをやり切り、他校のリサーチマインドを持つ同期の代表者達に出会いました。そのような、経験は貴重なものとなりました。

最後になりますが本大会に参加するのにあたり、多くのご支援ご協力を賜りました。今回の共同研究者である小暮さんをはじめとして、研究の機会と環境をご用意してくださり、ご指導賜りました口腔解剖学分野の大峽淳教授、東京の大会にまで足を運んでくださり様々なご相談にも乗ってくださった同分野の川崎真依子准教授、実験指導してくださいました同分野の川崎勝盛助教、SCRPについて対応してくださった歯学教育開発室の石田陽子准教授、大会本部との連絡や書類の準備に奔走してくださった学務系の渡部康雄様に深く感謝申し上げます。他にも多くの激励を賜りました先生方、プレゼンの確認や話を聞いてくれた同期など重ねて御礼申し上げます。



SCRP会場にて 筆者右

6年生国際学会参加報告

シンガポールでの見学を終えて

歯学科6年 安藤まな

11月19日から23日まで魚島先生と長澤先生、歯学科6年の坂上さんと後藤さんと共にシンガポールに行っていました。SEAADEという歯科教育の学会への参加とシンガポール国立大学歯学部の見学、大規模クリニックの全民Q&Mの見学を行いました。

学会では、講演の他に学生のポスター発表や口頭発表もありました。ポスター発表では、創意工夫を凝らしたプレゼン作品（子供たちに歯科について興味を持って予防や治療に取り組んでもらうようにするためのオリジナルのすごろくゲームなど）もあり、海外の学生の研究への強い熱意と発信力を感じました。また、学会で仲良くなった香港大学の学生は口頭発表をしていたのですが、彼女は発表も質疑応答もとても上手で、同じ6年生とは思えないほど素晴らしかったです。コロナ禍でオンライン開催になってしまいましたが、私自身もSCRIPとヨーロッパの国際学会（ESSD）に出させていただいたことがあります。私も精一杯頑張りましたが、海外の学生のレベルの高さに驚愕しました。今回、目の当たりにした海外の学生たちは非常に強い探究心や向上心があり、勢いが違いました。海外では歯学部は人気な学部で、入学も進級も厳しいため、学生たちは必死で勉強しています。英語はもちろんのこと、高い能力を持った彼らがこれから私たちと同じ時代の歯科医師になっていくと思うと、私たちはもっと努力し続けなければならないと感じました。私は大学院で研修予定ですが、その後、大学院に進学するかは考えているところです。今回の貴重な経験を踏まえて将来についても考えていきたいと思いました。

最後になりましたが、魚島先生をはじめ、支え

てくださったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

歯学科6年 坂上莉奈

2023年11月19日から4日間、クラウンブリッジ科の魚島教授と長澤先生と共にシンガポールに滞在し、学会への参加や大学やクリニックの見学を行いました。

学会SEAEDへの参加では、マレーシア、韓国、タイ、インドネシア、ベトナムなどから多くの先生方や学生が集まり歯学教育について探求しました。学生も研究ポスターやプレゼンテーションを行っており、各国の同じ学年の生徒が流暢に発表している姿にとっても感銘を受けました。また、他にもAIを歯学教育に取り入れる内容が、とても興味深かったです。日本の学生との違いや差も感じましたが、海外の学生との交流も行う事ができとても有意義な時間でした。また、その場で知り合った海外の歯学部生の子達とはお互いの教育カリキュラムや、臨床実習の現状について話し合う事ができ各国の歯学部事情を知る事ができました。そして、シンガポール大学の見学では実



シンガポールの歯科医院の10軒に1軒が所属する
大規模歯科医院グループQ&Mの本院にて
(筆者右から2、3、5人目)

習の形態や実習機材の構造、シモドントの設置など、新潟大学と共通する点もありました。

また、現地の大型歯科クリニックの見学では、独自のAIソフトを開発しており、パノラマX線を数秒間読み込ませるだけでう蝕の部位、根治の本数などを明らかにした上で、患者さんに提示する説明付きの資料まで作成できておりとても効率的だと感じました。

最後になりましたが、今回の滞在は現在の世界の歯学情勢を知る事ができ大変勉強になりました。自分に足りないところやこれからの未来について深く考えるきっかけになりました。このような機会を与えてくださった魚島教授、長澤先生、そして許可して下さった歯学部長井上先生、学務の皆様ありがとうございました。

歯学科6年 後藤 崇

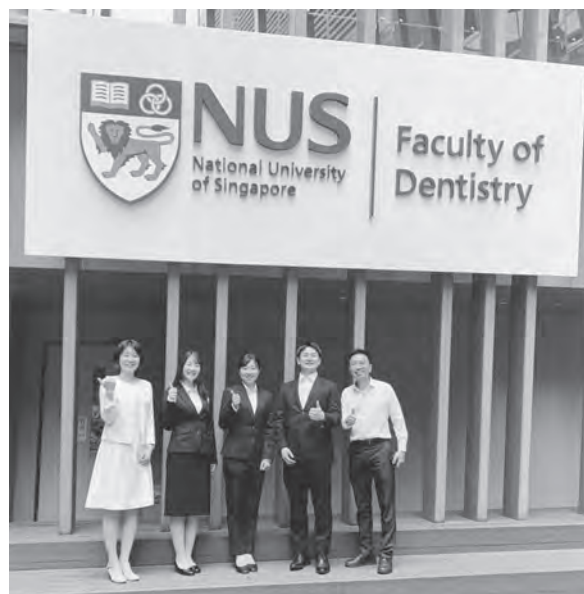
今回の滞在では、シンガポールをはじめとする各国の歯科業界について知ることができ、その勢いと数多くの優秀な人材に大いに刺激を受けました。まず、東南アジアの多くの国で歯学部と言えば、ともすれば医学部を超えるほどの人気があり、日本と比較にならないほど入学が困難な場合もあると知り驚きを隠せませんでした。たとえばシンガポールには一つしか歯学部はなく、毎年10倍を超える入学希望者が殺到するため、オールA

の成績のエリートでなければその道を閉ざされるといいます。また、香港も同様に歯学部は一つのみで非常に狭き門だそうです。6年間のカリキュラムの内5年間も臨床実習に費やすそうです。実習では学生一人につき看護師一人が付くといい、教育のあまりの手厚さに驚嘆しました。日本では1年しか臨床実習がないと伝えるとその短さに驚いており、卒後1年間の研修義務についても納得した様子で当然必要だろうと言っていました。彼らのような高い能力と堪能な英語力を活かして世界中に発信できる学生が、今後歯科医師として世の中に出ていく中、我々日本人がいかに存在感を示していけるかが課題になると感じました。

一方、日本のコンテンツの偉大さに気付かされることは何度もありました。SEAADEの1日目の夜には歓迎パーティが催され、中には各国の歌や踊りなどのパフォーマンスで盛り上がる場面がありました。日本の出番では参加者全員でドラえもんの主題歌を歌いましたが、曲が流れるや会場から大歓声が起こり、中には歌詞を口ずさむ人々もいて、大盛況のうちに終わることができました。大学病院や診療所の小児ユニットでも、ディズニーに並んでポケモンなどのキャラクターのグッズが多用されており、日本にも世界に誇るいいものを生み出す力があるのだと勇気をもらいま



SEAADE会場にて（筆者中央3名）



シンガポール大学歯学部の見学（筆者中央3名）

した。

自由時間には数多くの観光名所を満喫することができ、シンガポールならではの言語も宗教も肌の色も関係なく活気に満ちた雰囲気を味わうことができました。海外旅行も簡単ではない今日、学

生のうちにこのような機会をいただけて人生の視野が広がったように思います。魚島先生をはじめ、サポートしてくださった方々に厚く御礼申し上げます。



留学報告

高度口腔機能教育研究センター 日吉 巧

2023年3月より、アメリカのボストンにある、Harvard University School of Engineering And Applied Sciencesへ留学する機会を頂きました。留学の出発はトラブルの連続で、意気揚々と乗り込んだ飛行機が遅延し、乗り継ぎのカナダで妻と3歳の娘と一緒に取り残されました。そのカナダの空港では銃を持った男が現れ、パニックの中訳も分からず必死に逃げました。パトカーが列をなしたあの光景は一生忘れられません。

出鼻は挫かれましたが、滞在先のボストンは治安が良く、安心して生活しています。ボストンはハーバード大学やマサチューセッツ工科大学などトップクラスの名門校が多く存在する世界有数の大学都市です。また、ボストンはアメリカ独立戦争の舞台であり、ボストン茶会事件など様々な歴史的な出来事を肌で感じられる素晴らしい街です。多くのアメリカ人が観光に訪れる都市で、さながら日本の京都といったところでしょうか。

留学中、最も頭を悩ませていることは、アメリカの高い物価と円安です。借りたごく普通のア

パートは新潟の6倍の家賃が掛かり、体調を崩し受診した病院では、日本で数千円の血液検査が20万円(!)も掛かりました。そんな中、毎日のご飯やお弁当をやりくりしてくれる妻には本当に感謝しています。

生活は大変ですが、留学先では非常に充実した生活を送っています。所属しているSamir Mitragotri教授が主宰する研究室では、医療工学に関する研究が行われ、特に薬物浸透促進剤や、免疫細胞を用いた薬物の局所投与方法が開発されています。最初は医療工学については全くの素人で、言葉の壁もあり落ち込む日々が続きましたが、優しいラボメンバーの助けを借り、何とか楽しく研究を行えるようになりました。医療工学分野の発展は目覚ましく、口腔内疾患への応用の道を見つけようと日々勤しんでいます。

最後になりますが、留学先をご紹介いただきました中島麻由佳先生をはじめ、多くの先生方にご支援を頂戴し留学が実現したことに、心より感謝申し上げます。



Harvard Yardで娘と



Mitragotri教授のご自宅にてラボメンバー集合写真
筆者：前から2列目右から3番目

令和5年度Student dentist認定書授与式および臨床実習登院式の実施について

令和5年10月11日に、Student Dentist認定証授与式及び臨床実習登院式を行いました。Student Dentist認定制度は、共用試験（CBT・OSCE）の結果を基に、全国歯科大学学長・歯学部長会議およびスチューデント・デンティスト認定運営協議会が診療参加型臨床実習に必要な知識、技能、態度を有した学生をStudent Dentistとして認定するものです。今年度は歯学科5年次の学生50名がStudent Dentistに認定されました。また授与式に引き続いて臨床実習登院式が行われました。



台湾高雄医学大学歯学部との部局間交流協定

歯学部では国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。この度、台湾・高雄医学大学歯学部との部局間交流協定締結の手続きが終了し、井上学部長が令和5年10月17日に現地を訪問して交流協定を締結しました。高雄医学大学は台湾で最も歴史の長い私立医学大学として、1954年に「高雄医学院」として設立され、1957年には台湾初の私立歯学部が設立されています。1990年には台湾で歯科初の学位プログラムを設立、1992年には口腔保健科学大学院研究所を設立して歯科公衆衛生を促進するための具体的な基盤を提供し、台湾における歯科医療人手不足の問題解決のための高い社会貢献を果た

しています。本協定の締結により、歯学部学生の相互交流や教員、大学院生の研究交流が期待されます。



令和5年度「女性研究者開花プラン」 支援事業について

新潟大学では、令和2年度に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択され、その一環として上位職育成プログラム「女性研究者開花プラン」支援事業を実施しています。本支援事業は、女性教員の上位職登用の推進・活躍促進

のため、国内外の教育研究機関への派遣や学内における研究専念等の研修により女性教員の育成を図る部局の支援を行うものです。本年度は、歯学部から伊藤加代子先生（医歯学総合病院 口腔リハビリテーション科）の申請が採択されました。

令和6年度学長裁量ポイント (スイングバイプログラム) について

歯学系への配分予定であった摂食機能再建工学分野から、笹杏奈先生の採用が認められました。

教授人事について

令和4年12月末で退職した小野高裕先生（包括歯科補綴工学分野）の後任として、令和5年12月1日に同分野の堀一浩准教授が昇任されました。

新潟大学歯学部ゴルフ部

歯学科3年 大濱 正 篤

ゴルフ部には現在24名の部員が在籍しています。活動期間は4～11月で、練習は毎週月・水曜に日経ゴルフガーデンさんで行っています。行事にはOB戦や学内戦などがあり、お世話になっている先生方やOB・OGの方々とゴルフをさせていただきます。

ゴルフというと敷居が高いイメージがあるかもしれませんが、大学入学以降にゴルフを始めた部員ばかりです。どんぐりの背比べかもしれませんが、それでも上達を目指し練習に励んでいます。部員は兼部している人がほとんどで、ある種独特な雰囲気ของกลุ่มであるように思います。しかし部活動の様子をみると、和気あいあいとした穏やかな雰囲気とゴルフにふさわしい真剣さをあわせ持っていると思います。行事や催し事の時に団結力を発揮し、楽しく活動できることが私たちの良いところだと自負しております。

さて、本年度には新型コロナウイルスの流行による自粛期間が明け、オールデンタルが開催されました。ゴルフというスポーツでは、紳士的な態度が非常に重要であり、また規則に厳格なスポーツであるといわれています。その為ゴルフそのもの以外にも注意を払うべきことが多く、さまざまな課題を感じました。さらに、オールデンタル特有の格式からくる緊張感や、他校の存在感により苦しんだ部分もあります。オールデンタルで優秀な成績を収めた人たちには、場慣れしている上級生やジュニア競技経験者が目立ったように思います。環境に適応し力を発揮するためにも、私たちも実戦的なゴルフの機会を増やしていく所存です。

最後に、新潟大学歯学部ゴルフ部を支えてくださっている皆様方に心より感謝申し上げます。ご期待に応えられるよう、部員一同ゴルフに邁進してまいりますので今後とも何卒よろしく願いいたします。



「ゴルフ場での一枚」筆者は左



「集合写真」筆者3列右から4番目

歯学部卓球部

歯学科4年 清水 香奈

私が歯学部ニュースの原稿を執筆させていただくのは今回で3回目です。思っていたよりも私は入学当初から歯学部ニュースとご縁があるなと感じている次第です(笑)。執筆をさせていただき、とても光栄です。毎度稚拙な文章ではございますが、今回は部活動紹介について執筆させていただきます。

こんにちは！歯学部卓球部です。現在部員〇〇人で週〇回元気に活動しています！と言いたところですが、私たち歯学部卓球部は最大の危機に直面しております。そのため、今回歯学部ニュースの執筆依頼を受けた時、「ぜひ執筆をさせていただきたいけれど、危機に直面している歯学部卓球部で書けることはあるのだろうか」と不安に思ったのが正直なところです…私自身、国際交流サークルNEXUSとも兼部しているため、その活動(留学生との交流など)の様子や、普段の学生生活のことなら書きたいことがたくさんあるのに！とも思ってしまいました。というのも、私が1年生で歯学部卓球部に入部した当時は2年生、3年生、4年生、5年生の各学年にたくさんの先輩がいらっやって非常ににぎやかな部活動だったのですが、今では私たち4年生4人のみという非常に寂しい状態になってしまっているのです。様々なことがコロナを機に大きく変わってしまったようでした。追いコンは思うように開催できていない上、デンタルも出場できていません(人数の関係もありますが)。そのため、なかなかOBやOGの先生方とも関わる機会がありませんでした。今年はぜひ追いコンやOB戦などを開催し、たくさんのOB、OGの先生方と関わっていき

いものです。

また、昨年からはすべての練習を医学部卓球部と一緒にいき、練習の場自体はにぎやかになりました。他学部の学生の友達ができるのはすごく楽しいですが、やはり歯学部卓球部員が少ないのは寂しいです。ということで、最後に宣伝を少しだけ。ただいま歯学部卓球部は、新入部員絶賛大募集です。初心者から経験者までどんな方でも大歓迎です！私自身は大学から卓球を始めた初心者ですし、私以外にも初心者の部員はいます。友達と温泉卓球をした際にはかっこいいところを見せられますよ。もし経験者の方であれば豊富にいる経験者の医学部卓球部員と切磋琢磨して練習できること間違いなしです。もちろん学年は問いません。一緒に楽しく卓球をしましょう！みなさんお待ちしております。そして、また歯学部ニュースに関わる機会がありましたらぜひ執筆させていただきます(笑)。



筆者写真後列右から3番目

早期臨床実習を終えて

歯学科3年 石塚 蓮

3年生の前期に早期臨床実習Ⅱが行われました。新型コロナウイルスの影響も少しずつ収まってきたため、1年生のときの早期臨床実習Ⅰとは異なり病院内での実習が可能になりました。様々な診療科において先生からの説明、臨床の見学や少しだけ器具を用いた実習が行われました。自分を含め多くの3年生が初めて大学病院内に入ったことと思います。私は小さい頃、何度も歯科医院に通っていました。しかしそのころの患者としての視点とは異なり、多角的な視点を持つことができ、とても有意義なものでした。

実習の中で強く感じたことは2～3年生で学んだ基礎系科目と臨床のつながりです。どの診療科においても感じたことですが、特に放射線科でそれを強く感じました。放射線科では放射線学の知識が必要なのはもちろんですが、解剖学の知識がとても重要であり、密接に関連していることに驚きました。実習でエコーを使って自分たちの頸部を見たとき、解剖学を学ぶ前の自分だったら何もわからなかった白黒の画像が何を表しているのかが分かり、確かな感動を覚えました。ここまで無我夢中で学んできたことが身についており、また意味を成していることが嬉しかったです。また、月並みですが先生方の偉大さを改めて実感しました。様々な基礎系科目とこれまでの技術・経験を総動員し、一人の患者の治療の計画を考えて実行していく先生方の姿を見て尊敬とともに自分の目指すものの高さというものを痛感しました。

早期臨床実習Ⅱは今後の自分の学習の方向付けになったと思います。求められる知識や技術・患者に対する姿勢などを再認識する良い機会になりました。3年生の後期からより歯科系の専門的な授業が始まっていきます。早期臨床実習Ⅱで学んだことを少しでも意識しながら一つずつ身に付けていき、より良い歯科医師になれるよう頑張りたい

と思います。今回実習においてご協力を頂いた先生方、大変ありがとうございました。

歯学科1年 佐藤 知香

新型コロナウイルス感染症の流行により、3年間休止していた対面での早期臨床実習が今年から再開されました。1年の講義は教養科目が多かったのですが、医歯学総合病院で早期臨床実習をし、歯学部に入學したという自覚を持ちました。

早期臨床実習では、治療見学実習、患者役実習、車椅子実習、全体発表をしました。治療見学実習で大学病院を班別で見学して、歯科に多くの専門診療科があることに驚きました。どの診療科も初めて知ることが多く、とても興味深かったです。患者役実習では、6年生から歯型取りや歯科検診をしてもらいました。患者役をしてみても、患者さんへの細かいところへの配慮が大切だと感じました。車椅子実習では、患者役と介助役の体験をし、車椅子の押し方や声掛けの重要性を知りました。患者役では助けてもらえることのありがたみを感じ、介助役では患者さんへの配慮の重要性を知り、これから車椅子の方に接するとき、この経験を活かして適切に対応したいと思いました。全体発表では、治療見学実習とは違う人と班を組み、実習全体を通して気になったことを調べて発表をしました。同期や先輩と交流できたのは、対面形式での実習だったからこそだと思うので、これからもこの実習が対面で行われてほしいと思います。

大学病院で、白衣、フェイスシールド、メディカルキャップを着用して、感染対策や清潔を保って実習をしたことから、これから医療人になるという自覚、態度、身なりを知りました。6年生の先輩方を見たり、先生方からの説明を聞いたりして、これから歯科医師として学ぶことや必要なこ

とを知りました。それらをこれからの大学生活や将来に活かしたいと思います。最後に、これから対面で講義が受けられることに感謝するとともに、先生方、患者さん、先輩方など、この実習に関係された方々の協力があってこそその実習だったと思うので、この場をお借りして感謝を伝えたいと思います。

口腔生命福祉学科2年 水 間 希 美

「実際の現場に行くのは初めてだね!」「緊張する…」早期臨床実習ⅡBを控えた私達はこんな会話をしていました。1年時に行われた早期臨床実習ⅠBでは新型コロナウイルスの影響で病院見学をさせていただくことができず、講義やグループでの学習やプレゼンテーションを行いました。2年生になり、少しずつ新型コロナウイルスが流行する前の日常を取り戻し、歯科や福祉の現場での実習を体験させていただくことが出来るようになり、歯学部に入學してから初めての現場での実習に少しの不安と喜びの気持ちでいっぱいでした。

前半で行われた1歳6か月、3歳児検診の付き添い見学では検診や福祉の現場での歯科衛生士が担う役割について学びました。そこでの歯科衛生士の役割は歯科医師の補助にとどまらず、おやつや嗜好飲料の摂取状況の聞き取り、定期検診についてなど赤ちゃんとお母さんの様子をよく観察し、お母さんの疑問や心配事に寄り添いながら保健指導を行う様子が見られました。医療人として相手を思う気持ちや態度がとても重要だということに改めて感じました。また、ばんだい校園での実習では介護保険の制度や社会福祉士としての業務についても学ぶことが出来ました。同じ職業でも働く場所によって業務の内容が様々なことや、他の職種との関わりの広さに驚きました。

後半の授業では、バイタルサインの測定や歯科の外来における感染予防策、手洗いの方法など今後実習を行う上での基礎知識を学ぶことが出来ました。鋭利な器具や特殊な器具も多い歯科の分野でどのようにして患者と医療者の安全を守るのか

認識することのできるとても良い機会でした。

この早期臨床実習ⅡBの授業を通して様々な分野で活躍する歯科衛生士や社会福祉士の業務、そして実際の現場で働く方々の様子から医療や福祉の分野で働く上での真摯な態度の大切さや心構えについて学ぶことが出来ました。今後の授業や実習でも今回学んだ知識を活かして日々の学習に意欲的に取り組んでいきたいです。

口腔生命福祉学科1年 吉 倉 真 帆

今年度の早期臨床実習では患者役実習、治療見学実習、車椅子実習、グループ討議を行いました。前年度までは新型コロナウイルス流行の影響で、これらの代わりに講義が行われていたと聞きました。制限は緩和されてきたものの、まだ完全に収束していない状況で見学実習を実施していただき、非常に貴重な機会となりました。

患者役実習では歯学部6年生の方に診察していただき、私たち1年生が患者役となる実習を行いました。全3回で構成され、1回目は口腔検診を受け、歯型取りをしました。2回目は歯の染色をして磨き残しのチェックと歯磨き指導、3回目は2回目での歯磨き指導を実践できたかのチェックを行いました。1年生2人につき6年生1人だったので患者役だけでなく診療補助も体験することが出来ました。診療補助で作業内容を見た上で患者役になってみると今までよりも不安感が減り、治療する側が手順を説明することの重要性を実感することが出来ました。

治療見学実習では医歯学総合病院の歯科診療部門4系列12診療科で実際の患者さんの診察、治療を見学させていただきました。自分には馴染みのなかった診療科が多くあり、どの診療科も興味深かったです。その中でも特に、歯の診療科での歯の神経を抜く治療が印象に残っています。初めて聞く治療法や初めて目にする器具が多く、驚きの連続でした。冠ブリッジ科では模型の歯形取りを体験し、楽しみながら学ぶことが出来ました。

専門知識を学ぶときと視点が変わってしまうため、その前のこの貴重な時期に、患者さんと同

じ視点から見学でき、非常に良い経験となりました。今後、専門知識を学んでいく際には治療見学実習で見聞きしたことをもとにイメージを浮かばせながら、理解の手助けにしていきたいです。将

来、治療をする立場になった時には患者役実習で感じたことを思い出して、患者さんの気持ちに寄り添いたいです。



ポリクリを終えて

歯学科5年 荒井友菜

半年にわたるポリクリが終わり、歯学部に入學して4年半の月日が経過しました。5年生ではポリクリ、CBT、OSCEと歯学部生活において乗り越えなければならない壁があり、毎日忙しい日々を過ごしていたように思います。

ポリクリとは臨床予備実習のことで、模型実習と臨床実習の架け橋となる実習です。今まで学習したことを実際の臨床でどのように使えば良いのか、患者さんとのコミュニケーションについて学習しました。ポリクリで学んだことはたくさんありますが、その中でも相互実習で患者さんの体験ができたことは、私にとって貴重なものでした。長時間ユニットで横になっていると意外と疲れること、ミラーでの圧排が痛いこと、印象材は冷たくて苦しいこと、頬粘膜は引っ張られてもあまり痛くないことなど、実際に患者役を経験しなければわからないことがたくさんありました。知識や技術に加え、治療中の患者さんの気持ちを理解できることも、歯科医師として必要な力であると改めて感じました。



ポリクリ班のみんなと1枚 筆者は右から4番目

また、ポリクリ期間中は班のメンバーにたくさん助けられました。実習の進みが遅くて怒られても、染め出しで唇を真っ青にしても、笑って許して飲み会のネタにしてくれたメンバーだからこそ、半年間にわたるポリクリを乗り越えられました。最高のメンバーに支えられ、熱心な先生方の指導を受けることができた半年間は、長い歯学部生活の中の大切な思い出です。

歯学科5年 高平亜惟

秋も深まり肌寒くなってきました。早いもので入学して5年半が経過し、私たち55期生は臨床実習で患者さんを治療させていただく立場となりました。現在は臨床実習に向けての引継ぎ期間で、ポリクリを行っていたのがだいぶ前のことのように感じられます。

ポリクリとは、臨床実習に出る前の予備実習で、様々な課題が課せられています。今まで先輩方が緑衣を着て忙しそうにしているのを見てきたうえ、オリエンテーションで配布されたガイドブックも今まで配布されてきた実習書の何倍もの厚みがあり「やばい」と思った記憶があります。



登院式にて 筆者右下1番目

しかし実際は、各科を回って色々な経験をさせていただき、とても勉強になる半年でした。ポリクリの中には今までのような模型実習もありましたが、同級生の口の中を診たり治療したりと、臨床に活かせる場面がたくさんありました。同級生の口の中を処置するというのはとても緊張しまし

たが、その中でも一番緊張したのは下顎孔伝達麻酔の実習です。しかしこの緊張感があったからこそ、臨床実習に出る心構えができたのではないかと思います。医療従事者としての第一歩を踏み出したポリクリを経て、これからも総診での臨床実習に励んでいきたいと思っています。



学会受賞報告

日本補綴歯科学会第131回学術大会 課題口演賞

日本補綴歯科学会第131回学術大会 課題口演賞受賞報告

顎口腔インプラント治療部 高 嶋 真樹子

この度、日本補綴歯科学会第132回学術大会にて課題口演賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

咬合過負荷がインプラントの後期喪失やインプラント周囲炎の予測因子として報告されていますが、欠損歯のあるインプラント治療患者の咬合力を術前に正確に測定することは困難です。そこで我々は咬合力に関連する解剖学的因子とインプラント後期喪失の関連についての臨床研究をしてきました。本研究では、パノラマX線写真から測定できるゴニアル角とインプラント後期喪失の関係について調査し、ゴニアル角が小さい患者はインプラント後期喪失のリスクが高いことが明らかとなりました。この方法は、術前のインプラントの本数、直径、長さなどを検討する際に有用であると考えられます。今後は、より詳細な検討を行いインプラント治療の術前リスク評価に貢献できる研究を続けてまいります。

本研究の遂行にあたりご指導賜りました口腔生命福祉学分野の濃野教授、顎口腔インプラント治療部の荒井准教授、ご協力を賜りました諸先生方に心より感謝申し上げます。



左から2番目が筆者



横浜にて医局員と共に撮影 筆者右端

日本顎変形症学会 令和4年度学会賞受賞報告

組織再建口腔外科学分野・患者総合サポートセンター 新 美 奏 恵

この度日本顎変形症学会雑誌に投稿した論文「Orthognathic Quality of Life Questionnaire 日本語版の信頼性と妥当性の検討」が令和4年度の学会賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。この賞は顎変形症学会雑誌に一年間投稿された論文のなかから、2編程度選出される賞です。

現在、多くの臨床分野において生活の質(QOL)は重要な予後因子の1つであることが知られています。疾患特異的QOLは、医療のアウトカムを検証するために健康関連QOL(HRQOL)と同様に重要な指標です。Orthognathic Quality of Life(OQLQ)は、顎変形症患者の疾患特異的QOLの測定のために開発されましたが、これまで日本語版は作成されていませんでした。本研

究では逆翻訳法を用いて英語の原本から日本語版を作成しました。これを用いたアンケート結果から統計学的検討を行い、作成した日本語版OQLQの信頼性と妥当性を示すことができました。また、OQLQとHRQOLとの関連性も検討し、顎変形症患者の顎口腔機能が患者の精神的な側面に影響を及ぼしている事が示されました。今後もこの日本語版OQLQを顎変形症患者のQOL向上につなげていければと思います。

末筆ではございますが、本研究に当たりご指導いただきました小林正治教授、齋藤 功教授ならびに共同で研究していただいた先生方、研究に協力いただきました患者さんに心より御礼申し上げます。



第72回日本口腔衛生学会学術大会 論文奨励賞受賞報告

口腔生命福祉学講座口腔保健学分野 小田島あゆ子

この度、第72回日本口腔衛生学会学術大会にて2023年度論文奨励賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。受賞論文は「地域在住高齢者を対象とした口腔機能訓練が与える頸部可動域の改善効果」です。

高齢者における口腔機能は平衡機能と関連し、口腔機能訓練と運動器機能訓練の両介入は平衡機能を改善する効果があります。身体動揺の中でも頭部動揺は加齢による影響が出やすく、本研究では頭部を支える頸部の柔軟性に着目しました。地

域在住高齢者を対象に調査を行った結果、口腔機能訓練は頸部可動域を改善する効果が認められました。今後は口腔機能訓練が全身に与える影響、そのメカニズムの解明が課題です。

本研究の計画立案、調査および論文執筆においてご指導を賜りました葭原明弘教授ならびに新潟リハビリテーション大学の小林量作教授、新潟医療福祉大学の石上和男教授に心より感謝申し上げます。



第18回日本歯科衛生士会・ 日本歯科衛生学会学術論文優秀賞 受賞報告

口腔保健学分野 柴田 佐都子

この度、日本歯科衛生学会第18回学術大会において学術論文優秀賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。本賞は「歯科衛生の向上と実践に根ざした学術研究において優れた成果をあげ、人々の健康と福祉に寄与する研究に対し、その功績を称え、表彰する。」という主旨の学術賞で、口腔保健に関わる専門職として栄誉ある賞を受賞できましたことを光栄に感じております。

本研究において歯科専門職は医科医療機関との連携を進め、施設従事者に対し、具体的な通所者の口腔の問題や定期的歯科受診の重要性に関する情報提供を行うことが知的障害者の口腔の健康を維持するために有効であると示唆されました。知的障害者は口腔保健ニーズが高いため、今後も研究を継続したいと考えております。

最後になりますが、本研究をご指導くださった Roxana Stegaroiu 准教授、大内章嗣教授、共同研究者である由利由依歯科衛生士に深謝いたします。



第33回 日本顎変形症学会総会・学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正学分野 三村俊平

この度、第33回 日本顎変形症学会総会・学術大会において、優秀ポスター賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。演題名は「ウェアラブルデバイスを用いた骨格性下顎前突症患者の性別による咀嚼行動の違い」です。

これまで、健常者の咀嚼機能において性差があると報告されてきましたが、骨格性下顎前突症患者における咀嚼行動の性別による違いは未だ明らかではありませんでした。そこで本研究では、bitescan[®]を用いて骨格性下顎前突症患者の咀嚼行動を男女別に比較することでその特徴について検討しました。

その結果、骨格性下顎前突症患者においても咀嚼行動の性差が存在し、男性では不十分な咀嚼がBMIに影響を与えた可能性、女性では下顎骨形態と咀嚼行動が関連している可能性が示されました。

最後となりますが、ご指導いただきました齋藤

功教授、大川加奈子先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生方、小野高裕教授、堀一浩教授、大川純平先生、そしてご支援いただいた先生方に心より御礼申し上げます。



ポスター会場にて 齋藤功先生と 筆者右

歯科基礎医学会学術大会 モリタ優秀発表賞 受賞報告

歯周診断・再建学分野 笹川花梨

この度、第65回歯科基礎医学会学術大会において、モリタ学術発表賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。今回受賞した演題は「分泌型白血球プロテアーゼインヒビターによる歯周組織破壊抑制作用の解析」です。本研究では、宿主由来の防御因子である分泌型白血球プロテアーゼインヒビター（SLPI）をマウス歯周炎組織中に局所投与することで、プロテアーゼ活性による歯周組織破壊を抑制することを明らかにしました。さらに、SLPIが破骨細胞の分化を抑制

し、骨芽細胞の石灰化物産生を促進することが示唆されました。これらの結果より、SLPIが歯周炎に対する新たな治療戦略に繋がるのではないかと考えています。

最後になりましたが、ご指導いただきました土門久哲先生、平山悟先生、前川知樹先生、多部田康一教授、寺尾豊教授をはじめ、本研究にご協力いただいた先生方に心から厚く御礼申し上げます。



授賞式集合写真（右から6番目）

学会受賞報告

生体歯科補綴学分野 青 柳 裕 仁

この度、2023年度日本医用歯科機器学会第33回研究発表大会にてアイディア賞を受賞致しましたのでご報告いたします。日本医用歯科機器学会は歯科医療に使用される様々な機械・器具の開発および機能の改善を目的としています。

受賞演題は「SDGsの達成を目標としたアルジネート印象材の開発」で、日本製紙株式会社との産学連携による共同研究です。化学変性セルロースナノファイバーをアルジネート印象材に微量添加することにより、JIS T 6505歯科用アルギン酸塩印象材で規定される弾性ひずみおよび弾性回復量を満たし、かつ、アルジネート印象材粉末を最大約10 mass%削減できることが明らかになっ

たことから、SDGs達成を目標とした新規アルジネート印象材としての臨床応用への可能性が示唆されました。またこの研究成果を、日本製紙株式会社と本学とで特許出願（共同出願）することができました。

本研究の遂行および特許出願にあたり、ご助力頂きました日本製紙株式会社の金野晴男様、本学研究企画推進部産学連携課知的財産係の宮田敦久先生、江口稔康様、本学生体組織再生工学分野の金谷貢先生、朝日大学歯学部口腔病態医療学講座インプラント学分野の木村龍弥先生、本分野の魚島勝美教授および全ての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



日本補綴歯科学会第132回学術大会 デンツプライシロナ賞受賞報告

日本結合組織学会第55回学術大会 Young Investigator Award受賞報告

生体歯科補綴学分野 土 橋 梓

この度、日本補綴歯科学会第132回学術大会ポスター発表にてデンツプライシロナ賞、日本結合組織学会第55回学術大会ポスター発表にてYoung Investigator Awardを受賞致しましたのでご報告申し上げます。

歯根膜は口腔機能において重要な役割を果たしていますが、その再生は未だ困難です。“培養歯根膜細胞シート”は歯根膜細胞と自らが分泌した細胞マトリックス（ECM）の複合体で、歯根膜再生に有効と考えられていますがその詳細は明らかではありませんでした。そこで私たちは、培養歯根膜細胞シートに含まれる細胞の遺伝子発現パターン、ならびにECMのタンパク組成について網羅的な解析を行い、これを歯根膜組織と比較することにより、歯根膜細胞シートの特性の解明を試みました。解析の結果、歯根膜細胞シートではECMの合成と、内包する幹細胞に活性化が生じており、これが歯周組織再生に有効である可能性

が示されました。

最後に本研究の遂行にあたり御指導賜りました本分野の魚島勝美教授、加来 賢准教授をはじめ、ご協力いただきました先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



補綴学会表彰式にて 筆者左 加来先生と

令和4年度 新潟歯学会第2回例会 新潟歯学会賞受賞報告

組織再建口腔外科学分野 浅見 栄 里

この度、令和4年度新潟歯学会第2回例会にて新潟歯学会賞を受賞しましたので、ご報告申し上げます。発表した演題名は「2-methoxy-4-vinylphenolのRAW264.7細胞における抗炎症活性にはHO-1によるiNOS転写抑制が関与する」です。

2-methoxy-4-vinylphenol (2M4VP) は酒類の原料となるブドウ等の細胞壁に結合したフェルラ酸が酵母による脱炭酸反応によって生合成されるフェノール類であり、赤ワイン等に含まれる天然化合物です。2M4VPは炎症メディエーターである一酸化窒素(NO)を抑制し、抗炎症活性を有することが報告されていますが、その作用機序は未だに明らかになっていません。一方で、抗炎症作用をもつ抗酸化酵素HO-1は転写因子NF-E2-related factor 2 (Nrf2) が核内に存在するARE (antioxidant response element) に結合する

ことで転写が促進されること、さらにHO-1が誘導型NO合成酵素(iNOS)の発現を阻害し、NOの産生を抑制することが明らかになっていました。そこで本研究では2M4VPがNrf2/ARE経路を介してHO-1の発現を増加させ、iNOS発現を阻害することでNO産生を抑制するとの仮説のもと、2M4VPの抗炎症作用の遺伝子レベルでのメカニズムを検討しました。その結果、2M4VPはNrf2/ARE経路を介して作用することから、Nrf2活性化剤、HO-1誘導剤、iNOS阻害剤として機能することが明らかになりました。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導賜りました佐伯万騎男教授をはじめとする歯科薬理学分野の先生方、組織再建口腔外科学分野の小林正治教授、ならびにご支援いただきました全ての先生方に厚く御礼申し上げます。

第60回 日本口腔科学会 北日本地方部会 新人賞受賞報告

組織再建口腔外科学分野 笠原公輝

この度、第60回日本口腔科学会北日本地方部会において新人賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。受賞演題は「多分割Le Fort I 型骨切り術の術後安定性の検討」です。

本研究は多分割Le Fort I 型骨切り術の術後の顎位安定性について検討することを目的に行われました。その結果、手術後の変化量は水平方向、垂直方向ともに2 mm以内であり、正面から見た左右方向の変化量は1 mm前後と安定しているこ

とが明らかになりました。本研究からは多分割Le Fort I 型骨切り術は、術後の顎位も安定しており、複雑な顎変形を有する症例に対して有用な術式であることが示唆されました。

最後に、本発表に際してご指導いただきました当分野の小林正治教授、長谷部大地先生、歯科矯正学分野の齋藤功教授並びに本研究にご協力いただきました多くの先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。



表彰式にて 筆者左

IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023— Outstanding Poster Presentation Award受賞報告

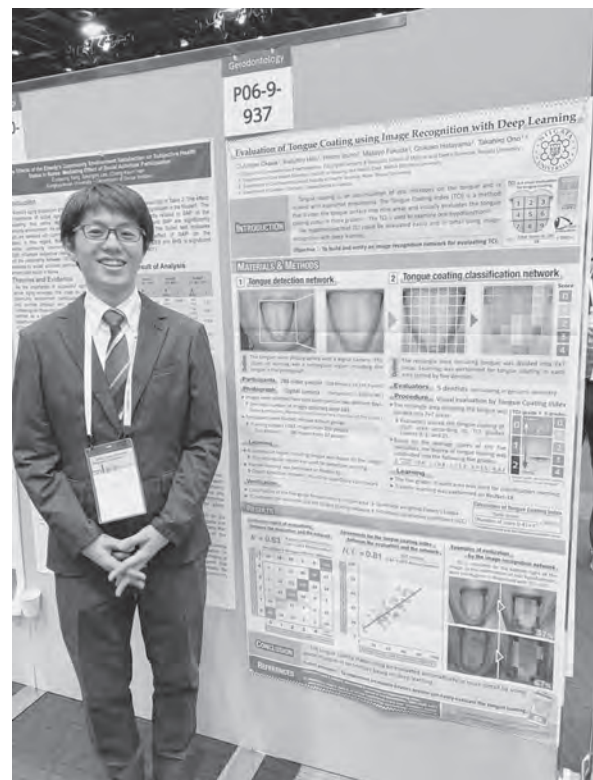
包括歯科補綴学分野 大川 純 平

この度、令和5年6月に開催されましたIAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023において、Outstanding Poster Presentation Awardを受賞いたしましたので、ご報告いたします。IAGGは老年医学を中心とした国際学会であり、今回はアジア/オセアニア地域を対象として開催されました。

演題名は「Evaluation of Tongue Coating using Image Recognition with Deep Learning」です。口腔衛生状態の指標となる舌苔の付着度は、口腔機能低下症の診断基準の1つとして視覚的に評価されます。本演題では、舌を評価するAIを構築することで、高齢者における舌苔の付着度を高い精度で、より詳細に評価できることを示しました。今後は、このAI技術を応用し、舌の乾燥度など他の評価への発展と、スマートフォンへの実装を行なっていく予定です。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導いただきました堀一浩教授、ならびに研究にご協力していただきました方々に心から厚く御礼

申し上げます。



IAGG-AOR2023にて

日本老年歯科医学会第33回学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

大学院 4 年 包括歯科補綴学分野 Ma. Therese Blanche Sta. Maria



I am pleased to announce that our poster presentation titled **“Cognitive Function-Related Changes due to Masticatory Behavior Modification: Two Randomized Controlled Studies by Age,”** received an “Excellence Award” at the joint poster competition of the 33rd Gerontological Society and the 34th Annual Meeting of the Japanese Society of Gerodontology last June 18 to 21, 2022.

This study examined the effect of improving masticatory behavior on the cognitive function of young and older adults using a chewing counter (bitescan, SHARP). Our results showed that improving the masticatory behavior can enhance cognitive function, especially the memory function of



With Shogo Yoshimura Sensei from Niigata University and Ryo Takehara Sensei and Yukina Miyazaki Sensei from Meiji University, during the cerebral blood flow measurement using the functional Near-Infrared Spectroscopy machine

older adults.

Lastly, I want to express my sincerest gratitude to my co-researchers from Niigata University and Meiji University, Professor Takahiro Ono, Professor Kensuke Yamamura, Professor Yumie Ono, Dr. Kazuhiro Hori, and Dr. Keiichiro Okamoto for their support and guidance and most especially to Dr. Yoko Hasegawa for patiently mentoring me every step of the way.



From left to right (Above) Yukina Miyazaki Sensei, Yoko Hasegawa Sensei, Takahiro Ono Sensei, Yumie Ono Sensei, Ryo Takehara Sensei, and me at the Division of Oral Physiology, Niigata University.

From left to right (Below) Rikako Sato Sensei, Kazuhiro Hori Sensei, me, Takahiro Ono Sensei, and Tasuku Yoshimoto Sensei after the awarding ceremony of the conference.

素 顔 拝 見

歯学教育開発室 特任准教授

石 田 陽 子

歯学教育開発室におります石田と申します。「素颜拝見」も3回目、在職期間も教授並みに長くなり、フレッシュさはゼロです。長いとは言っても、一時期本学からは離れておりましたし、頻繁に所属分野が変わっていますし、若干、「何者？」感があるらしいので、振り返ってみます。

本学をミレニアム卒業し、歯科補綴学第一教室の大学院に進学、学位は口腔生化学での研究で取得させていただき助教としても勤めさせていただきました。今でも現・包括歯科補綴学分野からは夏の納涼会にお誘いいただきますし（ありがとうございます！）、口腔生化学分野の照沼教授とは仲良くさせていただいています（これからもよろしくです！）。助教を退職して少しだけ外国に滞在したのち、新潟県内外で暫く勤務歯科医をしまして、本学予防歯科学からお呼ばれして特任教員として復職、何度か配置換えがあり現在に至ります。予防歯科学では、国際口腔保健を学ぶ大学院プログラムを開発するというお仕事をしました。その間に、歯学部では海外短期派遣・受入プログラム（SSSV）が始まりました。実は私、当時はSSSVに全然関与していなかったのですが、教授方が自ら本学学生をタイやらメキシコやらに連れて行ったり、来る留学生を新潟駅まで迎えに行ったり（教授が自分の車で！？）という姿を見ているうちに、「何かお手伝いすることありますか…？」と余計な手を出していましたところ、今はすっかり本務となっております。突然私事ですが2015年に出産しました。2016年からは「国際歯科保健医療学入門」という科目を担当し、歯学科2年生と

一緒に海外の医療や歯科医療事情を楽しく勉強しております。SSSVはコロナ禍で途絶えましたが、その間に、本学では文部科学省の「国費留学生を優先配置する特別プログラム」に採択され、優秀な国費留学生（大学院生）の受入が始まりました。募集、文科省への提出文書収集、大学院入試、宿舍申込、来日後の役所手続までワンストップサービスを行っております。アパートの手配にまで関わると、不動産用語も通訳しなければならず、今や敷金礼金とかまで英語で説明できます。（現在は請負業者があり、楽になりました）

さて、昨年よりSSSVプログラムも再開いたしました。条件等が毎年厳しくなり、やっぱり大変ですが、若い学生が外国行ったり留学生が来たりするのはとても楽しくもあります。学内の先生方は、私からメールが行きますと、「また石田からなんか外国人の頼み事か…」と直感されてしまうと思いますが、その通りです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



2023年3月に再開した短期受入プログラム全留学生
筆者最前列右





摂食嚥下機能回復部

小 貫 和佳奈

2023年4月より摂食嚥下機能回復部の助教を拝命しました、小貫和佳奈（おぬきわかな）と申します。出身は茨城県北部の日立市、阿武隈山地の南端と太平洋に挟まれた片田舎です。海沿いですので冬の冷え込みも穏やかで降雪はなく、食べ物も美味しく、住み良い町です。有名どころはひたちなか海浜公園のネモフィラとROCK IN JAPAN FESでしょうか。中高は千葉との県境である利根川の河川敷にある学校に進学し、常磐線の普通列車で片道3時間をどんぶらこ通学しておりました。

新潟大学歯学部47期として入学、医歯学剣道部に所属しました。未経験なのに同期と一緒にうっかり入部してしまったのですが、剣道はダイナミックかつ繊細でとても楽しく、同期10人、総部員が40人近い大所帯時代もあり、なかなか濃い時間を過ごしました。また青春18きっぷや高速バスで国内を巡りつつ各所で美味しいものを食べるのが好きになり、卒業旅行は屋久島から新潟まで北上しながら各地にいる知人に会い、学生時代集大成旅といった様相でした。興味の赴くまま好きなことをし（結果、音楽とお笑いに傾倒）、お察しの学生生活でしたので、教員の立場になり反省もより色濃いですが、アンテナを広く持ち、人との繋がりを大切にすることを一番に据えたいと思い、今も仕事や生活で心掛けている次第です。

私が摂食嚥下リハビリに興味を持ったのは5-6年の臨床実習でした。たった1週間の実習でしたが、実際に「何の気兼ねもなく好きなものを好きなように食べられる状況ではない」方々を目の前にして、必要性を認識しました。長岡赤十字病院 歯科口腔外科と当科での臨床研修後、歯科治療も問題なくできなばと一旦実家開業歯科を経て、当科大学院に入学しました。摂食嚥下障害の臨床をやりたい、実家での診療も続けたいとい

う身勝手を通して頂きつつ、周りの先生方のお蔭で今に至ります。また2019年の口腔機能検査室の立ち上げから関わらせていただき、当院歯科外来における口腔機能低下症の臨床研究を継続し、現在は臨床研究推進センターのバックアップのもと「口腔機能管理が身体機能にもたらす効果」に関する縦断研究を開始しております。

医療連携や顎義歯、口腔機能精密検査に関連してなど、皆様には大変お世話になっておりました、いつも有難うございます。病棟と口腔機能検査室を中心に生息しており、ばたばたと落ち着きないかもしれませんが、是非気軽にお声掛け頂きますととても嬉しいです。

患者さんのために自分の立場からできることは何か、日々の臨床はもちろん、教育や研究の大切さは、遅れ馳せながら実感をもって理解しつつあるように感じています。大学や病院、地域の力に少しでもなれるよう精一杯努めますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



小児歯科・障がい者歯科診療室

朴 沢 美 生

令和5年4月1日付で小児歯科・障がい者歯科診療室の助教を拝命しました、朴沢美生（ほうざわみお）と申します。この度は貴重な執筆の機会をいただき、ありがとうございます。大学生の頃から歯学部ニュースを愛読しておりましたので、まさか自分が素顔拝見を書く時が来るとは思ってもいませんでした。拙い文章でお見苦しいかと思いますが、自己紹介を述べさせていただきます。

私は岩手県奥州市水沢というのどかな土地で育ちました。あのメジャーで大活躍中の大谷翔平選手の出生地です。父が歯科技工士をしており、幼き頃から印象材やワックスなどが身近にある生活をしておりました。叔父が歯科医ということもあり、将来は医療系の職に就きたいと考えるように

なり、推薦入試を経て新潟大学歯学部48期生として入学しました。大学の部活動は、優しく美しい先輩方に魅了され、弓道部を選択しました。弓道はあまり動かないので辛くないイメージがあるかもしれませんが、半個室の道場での部活動は、夏は暑く冬は寒い、そんな過酷さがありました。しかし、的の中心に矢が当たったときの爽快感は良いもので、その感覚を求めて、休日も自主練習をしていたことが、今ではとても懐かしいです。現在は一人で自主練習できるという点で通じる、ゴルフが趣味になっております。まだまだ練習中ですが、ラウンドすると自然に触れることができとても気持ちいいのでおすすめです。他に私の生活で重要なものは、美味しい食事とワインです。小さいときは食に興味のない、“食べない子”だったはずが、新潟のごはんが美味しすぎて目覚めてしまいました。

話が逸れてましたが、大学卒業後は、苦手を克服したくて半年間小児歯科学分野で研修をしました。こどもと接する機会がそれまでなく、将来開業医でこどもを診る時に対応に困るなあ、という

気持ちくらいで研修先を選んだのですが、小児歯科学の奥深さを知りもう少し学びたいと思うようになりました。さらに、支援学校の教師をしていた母の影響で「障がい者」の分野にも興味があったこと、専門医を取得したいと思っていたことから、小児歯科学分野へ大学院の進学を決意しました。大学院では、小児の口唇機能と口腔内圧の制御の解明を研究テーマとし、早崎先生と中村先生のご指導のもと研究を行いました。口輪筋の表面筋電図と口唇閉鎖圧と口腔内圧が同時計測可能な装置を用いて、現在も新たな知見を得るため研究を継続しております。今後も小児歯科を通じて歯学部の発展に貢献できるよう、日々邁進していく所存です。

最後になりますが、今年4月からは当分野の医局長を務めております。周りの方々にいつも支えていただきなんとかやっていると現状ですので、この場をお借りしてして御礼申し上げます。未熟者ゆえ至らぬ点があるかと存じますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



My story in a nutshell: chasing my dreams

Division of Oral Anatomy 2
Finsa Tisna Sari

My name is Finsa, a PhD student from Yogyakarta, Indonesia. Yogyakarta is a student city in Indonesia and it is located in the middle of Java Island, one of the big islands in Indonesia.

The journey led me to the Graduate School of Medical and Dental Sciences at Niigata University in 2021. My first encounter with Japan occurred when I attended a conference in Kobe. The research environment and lifestyle in Japan made me want

to pursue my studies in Japan.

Due to the pandemic situation, I had to wait for a while before finally moving to Niigata in early December. I was so excited because this was my first time living in a four-season country. However, I needed some time to get used to the academic and social environment, particularly during the winter. I am grateful to the teachers and friends who have supported me here.





I love Niigata's beauty, culture, and food. Niigata has its own beauty in every season. But the most favorite season for me is spring. I can see diverse varieties of stunning flowers that I haven't seen before. New hope arises with spring, which coincides with the appearance of new sprouts after a gloomy winter. During my holidays, I like to spend time exploring new places. It turns out that Niigata and Japan have numerous beautiful places, such as Takada, Ojiya, Tokamachi, Kyoto, Nara, Hakone, and many more.

In the division of oral anatomy 2, I am conducting research on orofacial development,

especially related to cellular aging known as senescence. I initially focused on senescence during my master's degree. I am inspired to learn more about senescence in developmental biology using the transgenic mouse. Now I can do things that in the past I could only read about in journals. This is something I have dreamed about in my life.

Even after two years here, there are still many things that I need to learn. I hope that the lessons I've learned will help me grow and become a better person, even though I know that life won't always be easy.

Living the dream: Niigata

口腔解剖学分野

Vanessa Utama

My name is Vanessa Utama and I am from Indonesia. I was born and raised in Medan, in the North of Sumatra. I graduated from Padjadjaran University in 2013 with a degree in dentistry. In 2017, I attended the University of Indonesia to complete my Master's degree in Forensic Dentistry. A Japanese animation movie – Spirited Away, is one of my favorite movies of all time and as someone who has a dynamic personality and loves to explore places, I have always been fascinated by the beauty and rich culture Japan offers. However, I had never thought that one day I would have the opportunity to stay and live in Japan.

I am the only child in my family. My parents are both lecturers and they have always inspired me all my life. After I had finished my master's degree, I joined Trisakti University as a junior lecturer. From there, I was offered a position as a doctoral student at Niigata University. With a lot of advice and guidance from my professor at Trisakti University, I was awarded the MEXT International Scholarship. I was so happy and thrilled because I was living the dream.

I have always had a passion for dental age and development, so I went to Niigata University to study in the Department of Oral Anatomy. I am so grateful to have learned so much and also had the experi-

ence of working in a laboratory with various kinds of devices based on the latest technology at Niigata University thanks to the encouragement from Ohazama Sensei, and also the help I got from Maiko Sensei and Katsu Sensei in managing the challenges in my work project.

Apart from doing my studies as a second-year Ph.D. student, I do love being out traveling and exploring Japan. I enjoy the beautiful sightseeing, especially the old buildings, such as shrines, temples, palaces, and traditional Japanese houses. They have always captivated me greatly. I am



also very fond of Japanese cuisine, in particular the ramen noodles. As a ramen fan, Japan is definitely a country of ramen paradise for me, and I plan to taste each and every ramen noodle I can encounter in Niigata.

From where I come from – Indonesia, is an equatorial country where there are only 2 seasons; the dry season and the rainy season. It is therefore such a wonderful ex-

perience to be able to enjoy and live in a country with 4 seasons. The blooming of seasonal colorful flowers of spring, the fireworks and summer festivals, the red trees and leaves in fall, and also the freezing thick snow in winter, have been a marvelous experience for me. I never stop being eternally grateful for this wonderful opportunity and I will strive to grow as a better version of myself.



退職によせて

退職に寄せて

生体歯科補綴学分野 魚 島 勝 美



私は平成13年11月から新潟大学歯学部にお世話になっており、22年が経過しました。それまで2～3年をサイクルとして色々なところを転々としていた私ですから、当初はこれほど長くお世話になるとは思っていませんでした。先ず旧第二補綴学分野（クラウンブリッジ）の助教授として着任し、野村修一教授の下でクラウンブリッジに関する教育を担当させていただきました。また、当時歯学部歯学科のカリキュラム改編が年次進行の2年目でしたので、3年生の歯型彫刻実習を歯の形態学という新科目として再編し、5年生の空き枠を使った総合模型実習の開講に向けた準備に着手しました。更には当時各大学で始まっていた教員教育（FD）を所掌する委員会委員長を拝命し、ワークショップ形式の宿泊研修を教員全員に対して実施しました。突然現れて前例のないことを言い出した私を受け入れていただき、サポートしていただいた多くの先生方、特に自ら進んで飛んで火に入っていた齋藤功先生、小野和宏先生には本当に感謝しております。また、WS開催に関する大先輩である東京医科歯科大学（当時）の俣木志朗先生にも何度も現場でご指導いただき、感謝しております。

その後旧第二補綴での約2年間を経て、平成16年に歯科総合診療部の教授を拝命しました。新潟に異動する前には教育専門部署に所属していたので、当時未だ教育活動に対する評価が低かったとはいえ、私としては歯科の臨床教育を専門とする立場には違和感がありませんでした。ただ、この時一番大変だったのは歯科医師臨床研修の必

修化です。平成8年からの10年間の臨床研修の努力義務を経て、平成18年から義務化されたのですが、大学としてどのような対応が必要なのか、定員をどのように設定するのか等、厚生労働省側も対応が遅れていた中で大変苦労しました。全国の総合診療部の先生方と毎年の歯科医学教育学会の折に会合を持ち、厚生労働省の専門官もお招きして情報交換をしたりもしました。病院の予算と厚生労働省からの要請に乖離があって定員のやりくりも大変でしたが、当時の病院長であった宮崎秀夫先生にもご理解とご協力をいただき、何とか軌道に乗せることができました。どうも有難うございました。

私としては、総合診療部で骨を埋めるつもりでしたが、当時の学部長の前田健康先生のご努力もあって補綴学教育を担当する分野が再編され、有床義歯を専門とする野村先生と並んで補綴学分野の教授を拝命し、分野名を生体歯科補綴学分野としたのが平成20年6月のことでした。以来、副病院長や副学部長として色々なことを学ばせていただきました。副病院長としては外来移転に関して当時の齋藤力歯科担当総括副病院長と頭を悩ませ、副学部長としては海外の歯学部との協定締結、学生の海外派遣、国際関係の各種申請書作成等、大変なことも沢山ありましたが、今となってはとても良い思い出です。

私が常に目指したのは、後進の育成です。当分野担当の教育プログラムは多岐にわたりますが、これら全てで従来の方法を大きく変えたのもそういった考え方に基づきます。また、国際化に向けた活動も然りです。大学人としての立場からは研究も非常に重要なので、それはそれとして私も努力してきました。ただ、後進の育成に熱心でない組織は必ず衰退する、というのが私の考えです。ですから、新潟大学歯学部として、歯科界として私たちが担うミッションを常に意識してきたつもりです。

これまで歯学部、教室員、大学院スタッフ、同窓会や歯科医師会の先生方等、多くの方々にサポートしていただき、何とか無事にゴールできそうです。ただ、これは私のゴールであって、組織のゴールはまだ先にあります（逃げ水の如く

永久にゴールなどないと言った方が正確でしょうか?）。これまでお世話になった多くの皆様にはこの場をお借りして心から御礼申し上げます。新潟大学歯学部の今後益々のご発展とご活躍を祈念しております。どうも有難うございました。



素晴らしい出会いに感謝！

組織再建口腔外科学分野 小林 正 治

1983年に新潟大学歯学部を卒業し、第一口腔外科に大学院生として入局してから41年の歳月が経ち、教授として11年間の在任期間を終えて、この度無事に定年退職を迎えることができました。肩の荷が下りて、ホッとしたというのが正直な気持ちです。

私は、学生時代に口腔外科学の講義を聴き、口腔外科医として生きていきたいと決意して口腔外科の世界に足を踏み入れたのですが、この年齢になるまで大学に在籍するとは、露程も思っておりませんでした。

入局してすぐに、中島民雄教授から「君の研究テーマは、顔面形態の三次元分析になったから。方法は確立しているから、あとはやるだけだよ」と言われました。確かに指導教官であった上田健先生の頭の中には方法論が出来ていましたが、それを形にしなければなりません。本研究は、2方向から撮影された顔面写真から透視変換を応用して軟組織上の測定点の三次元座標値を算出し、顔面形態を評価するというもので、当時発売されたばかりのNEC社製PC-9801Eというパソコンを用いて解析ソフトのプログラミングから始めました。この頃は、私の脳も若く、バグを直す

ために常に頭の中でプログラムが回っていました。この研究では2編の論文を作成しましたが、コンピュータグラフィックスの進歩は目を見張るものがあり、われわれは早々にこの研究から撤退しました。しかし、この研究が基で私の主たる専門分野が顎変形症になりましたので、私の人生を決めた研究でもあります。中島先生には、私の研究マインドの基礎を養成していただいたと感謝しております。

私が42歳の時に、中島先生の後任として東京歯科大学から齊藤 力教授が着任されました。正直に言うと、齊藤先生と専門が完全に被る私は居場所がなくなるのではと危惧していましたが、齊藤先生には上手にすり合わせをしていただきました。また、齊藤先生が日本顎変形症学会の理事長に就任され、私も幹事として診療ガイドラインの策定や実態調査など様々な事業のお手伝いをさせていただきました。この経験を通して広い人脈を得ることができ、私も人として成長できたと感謝しております。

退職にあたり、素晴らしい師、先輩、同僚そして後輩に恵まれ、望外の幸せな人生を送らせていただき、感謝の念に堪えません。最後に、新潟大学歯学部がますます発展し、優秀な人材を輩出していくことを祈念して、退職の言葉とさせていただきます。長年、お世話になりました。ありがとうございました。



中島民雄先生、齊藤 力先生と

退職に寄せて —歯学部で過ごした半世紀—

新潟大学大学院 歯科矯正学分野 齋 藤 功



昭和53（1978）年4月に新潟大学へ入学して以来、歯学部生として6年間、大学院生として4年間、そして教員として35年以上、合わせて半世紀近くを歯学部で過ごしてきました。幼少期より歯科医師になりたいと考えていたもので、歯学部に入学できたことはとても嬉しかったのですが、まさかこれほど長期間にわたって歯学部にお世話になるとは思ってもみませんでした。いろいろな方々との出会いや巡り合わせで、歯学部において定年まで仕事をさせてもらえたことは本当に幸運でした。どちらかというと言きっぱい性格なのですが、中学から本格的にはじめたサッカーと大学院生時代から現在まで専門としてきた歯科矯正学・矯正臨床については飽きることなく興味を持って取り組んできました。矯正歯科治療は新たな形と機能を創り出す創造の医療で、予後の把握と適確な対処法を見出すには継続した研鑽が不可欠である、と身をもって体験したことから長年に渡って携われたのだと思います。

大学院修了後、昭和63（1988）年4月助手（現助教）に任官（当時は国家公務員）され、1996年に歯学部附属病院講師となり、平成16（2004）年10月1日付で医歯学系（医歯学総合研究科・歯科矯正学分野）教授を拝命しました。教授就任時に立てた目標は、邂逅を大切に矯正歯科の基本的知識と技術を兼ね備えた人材を育成すること、臨床に即した大学ならではの基礎的・臨床的研究を遂行すること、そして新潟大学の特色である連携医療推進に寄与することの3つでした。就任後5年、10年、15年と節目の年には、これらの目標がどの程度達成されているか、不十分な点はどこなのかを自問自答し、少しでも前に進められるよう励んできました。

就任当初より、当分野へはすべて大学院生とし

て入局してもらいました。その結果、19年間（2023年3月31日現在）で66名（含：国費留学生10名）の学位取得者を出すことができました。これは、医局員はもとより基礎系・臨床系他分野の先生方からご協力、ご支援をいただけたお陰ですが、本学のみならず他大学から多くの卒業生が当分野の門を叩いてくれたことは驚きであり、かつ有難いことと思っています。また、臨床系大学院生は博士号の取得のみならず専門領域の資格取得も目指して入局します。矯正歯科領域では、2008年より日本矯正歯科学会認定医の育成に関わる研修・審査制度が厳格化しましたが、当分野からはこの制度発足後15年間（2023年11月20日現在）で41名の認定医を輩出することができました。したがって、人材の育成においてはある程度の成果を挙げられたと自負しています。研究においては、大学院生および若手医局員の豊かな発想によって継続して成果を公表し、2007年度から今年度に至るまでの16年間、連続して学会賞、学術奨励賞、論文賞あるいは優秀ポスター賞などを受賞することができ、第三者からも一定程度の評価をいただけたものと思っています。連携医療の実践については、口唇裂・口蓋裂の治療管理や顎変形症に対する外科的矯正治療において、口腔外科を中心とした他診療科（室）と協働して症例を蓄積するとともに臨床研究の推進を図れたことで、治療結果の質が向上し地域から信頼される医療の提供に寄与できたと考えています。

翻って、教授就任直後から暫くの間、大学の在り方や歯学系の各種制度は変革期にありました。たとえば、就任半年前の平成16（2004）年4月1日、国立大学は国立大学法人へ移行、平成17（2005）年～18（2006）年にかけて医療系大学間共用試験の必修化、さらに、平成18（2006）年に歯科医師臨床研修の必修化がなされました。新米教授として種々の制度改革には戸惑うことも多々あり、教授を拝命した当初の営みを振り返ると紆余曲折、悲喜こもごもといった形容があてはまります。しかし一方で、教授という立場に立たせていただいたお陰で、学会活動や公的会議をとおして他大学の多くの先生方と交流し視野を拓けられたことは大きな財産であり、19年以上にわたる教

授としての生活を振り返ると総じて楽しいものでした。教授（教員）として心がけてきたのは、孔子が言うところの「夫子の道は忠恕のみ」でしたが、果たしてこれまで接してきた学部生、大学院生の人たちがどう感じていたかはわかりません。

最後に、これまでお世話になったすべての方々

に感謝申し上げますとともに、新潟大学歯学部がさらに魅力ある学舎として繁栄することを心から願っています。

(2023年11月20日記)



主管校として開催した第82回日本矯正歯科学会学術大会（会期：2023年11月1日（水）～3日（金）、会場：朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター）閉会后における医局員との集合写真。定年退職最終年度に、学会理事長と大会長を兼務という貴重な体験をさせてもらったことも幸運でした。

退職に寄せて

口腔保健学分野 吉羽 邦彦



本年3月末をもちまして、新潟大学大学院教授を定年退職することになりました。1988年3月に新潟大学大学院歯学研究科を修了し、1989年1月に新潟大学歯学部附属病院・助手（第1保存科）として採用されて以来、教員として35年の月日が経ちました。大半は歯科保存学第一教室（う蝕学分野）に所属しておりましたが、縁あって、2018年10月から口腔生命福祉学科の専任教員として、主に歯科衛生士養成教育に携わってまいりました。

歯科衛生士臨床実習のコーディネーターを2020年4月から担当することになりましたが、この年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が急速に拡大し、4月7日に最初の緊急事態宣言が出されました（～5月25日）。そのため、医歯学総合病院の外来診療はほぼ中止となり、4年生（14期）の病院実習も4～6月の間、完全停止を余儀なくされました。この間の各診療科ローテーション実習は代替課題にての対応となり、このまま臨地実習なしで卒業できるのかと心配しましたが、幸にも制限が徐々に緩和され、目標の実習ケース数を全員がクリアすることができました。病棟実習については、その後も立ち入りの制限が続いておりましたが、2023年5月8日、感染症法上の「5類」に引き下げられ、現在はほぼ感染症発生前の実習形態に戻っています。

口腔生命福祉学科における歯科衛生士教育では、臨床講義、基礎実習、相互実習、そして臨床（臨地）実習を含め多くの授業で、医歯学総合病院・各診療科の歯科医師、歯科衛生士、看護師の皆さんばかりでなく、言語治療室や歯科撮影室のスタッフなど様々な職種の皆さんにご指導頂いております。さらに、訪問歯科診療の学外実習では歯科診療所の先生にご指導頂いております。今後ともご協力とご指導のほどよろしくお願いいたします。

ます。

さて、口腔生命福祉学科に異動するまでは主として歯学科の教育に携わり、保存修復学ならびに歯内療法学に関する講義・実習、および臨床実習を担当しておりました。また、歯学科では5年次に臨床実習前の共用試験（CBT、OSCE）が実施されていますが、加えて2020年度より6年次の診療参加型臨床実習の評価としての共用試験（Post-CC PX）が正式実施となりました。Post-CC PXは臨床実地試験（CPX）と模型を用いて臨床能力を評価する一斉技能試験（CSX）の2つから成ります。本学では2016年度から同様の試験をそれぞれACKPIS、ATeSTとして実施しており、両者に合格することが臨床実習修了の要件となっています。

私は、臨床実習終了時のATeSTに使用する模型の策定に参加し、また試験の評価に従事しておりました関係から、本学のCSX実行責任者を担当することとなりました。2019年度のトライアルを含め本試験の実施にあたり、試験の準備、監督や課題評価を担当頂いた多くの先生方、ならびに学務係職員の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。

研究に関しては大学院入学以来、一貫して「歯髄保存療法」に関連した研究に携わっております。歯髄の創傷治癒・修復象牙質形成メカニズム、各種覆髄材に対する生体反応などについて、イヌ、サル、ラット、そしてヒトを対象として様々な実験を行ってまいりました。学位論文は水酸化カルシウムによる組織の石灰化機構に関するもので、その後、覆髄部直下に形成される石灰化層が象牙芽細胞様細胞の分化に重要な役割を果たしていることを明らかにしました。現在、覆髄材として広く使用されているMTA等のケイ酸カルシウム系材料についても、その生物学的特性は水酸化カルシウムと類似しており、同様の反応が認められています。

また近年、失活した根末完成永久歯に対して根の伸長と幅径の増加を期待した「再生歯内療法」が注目されています。米国歯内療学会（AAE）は、本療法に使用する根管消毒剤の一つとして3Mix（3種混合薬剤）を推奨しています。3 Mix

療法は1990年前後に本学の歯科保存学第一講座と口腔細菌学講座との共同研究によって開発されたもので、当時、私も覆髄材への応用の可能性について検討を行っておりました。その3Mixが現在、世界的に脚光を浴びているのを目の当たりにして、感慨深いものがあります。

さて、口腔の健康と全身の健康の関連性が明らかにされ、健康寿命を伸ばすために口腔健康管理（口腔ケア）が重要であることが認識されています。現在、生涯を通じた歯科健診（いわゆる国民皆歯科健診）に向けた取組も推進されており、今

後、口腔ケアのプロフェッショナルとして特に歯科衛生士の役割が益々重要となると思われます。歯学部学生の皆さんには、これからの歯科保健医療をリードするとともに、時代の潮流や社会の変化に柔軟に対応できる歯科医師・歯科衛生士として活躍されることを期待しております。

最後になりましたが、これまでお世話になりました全ての方々に感謝申し上げますとともに、新潟大学歯学部の益々の発展を祈念しております。長い間ありがとうございました。



技工部だより

医療技術部歯科技工部門 佐藤 秀行

令和5年4月より医療技術部歯科技工部門でお世話になっております、歯科技工士の佐藤秀行と申します。“秀行”と書いて“しゅうこう”と読みます。学生時代から珍しい読み名ということもあり“しゅうこう”と呼ばれていました。

この度は「技工部だより」の記事を寄稿させていただく機会を頂きましたので本年度、入職ということもあり僣越ながら自己紹介をさせていただきます。

出身は福井県福井市で恐竜、蟹、メガネで有名な県です。新潟とは同じ日本海側で気候、文化などが似ているところがあります。来春、北陸新幹線が敦賀まで延伸され新潟からも少し近くなりますので興味を持たれた方はぜひ観光に来てください。

幼少期からものづくりが好きで電子工作や壊れた家電製品を分解し修理するなど手を動かすのが好きな少年でした。ものづくりが好きな少年は必然的に工業高校の電気科に進学し部活でソーラーラジコンカーをチームで製作し夏休みの炎天下で日焼けも気にせず活動していました。石川県で行われた大会では惜しくも2年連続、準優勝止まり

と今では苦くも良い思い出です。

進学を機に新潟に越し10年になります。明倫短期大学生体技工専攻科を修了後、同学附属歯科診療所で6年間勤務してまいりました。前職では一般的な補綴がメインで義歯、クラウンブリッジ全般を担当していました。新潟大学では顎義歯やインプラントなど特殊な症例から放射線治療に用いるシーネ、ホッツ床など歯学部を有する病院ならではの幅広い装置の依頼にびっくりしています。大学病院という特殊な環境でいろいろな経験をさせていただき日々新しい発見や学びが多いこともあり楽しいです。

同時に難しい症例もたくさんあり判断に迷った際、一人で悩まず先輩技工士に相談できる環境で安心して仕事が出来ています。まだまだ技術を吸収すべき事が多く日々研鑽を積み知識、技術を向上させていきたいです。

最後に、まだまだ未熟者ではございますが新潟大学歯学部、病院の発展のために尽力していく所存です。皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

技工部だより

医療技術部歯科技工部門 清水 浩 紀

2023年4月より医療技術部歯科技工部門にて勤務しております清水浩紀と申します。

出身は岐阜県の大垣市です。岐阜県大垣市と聞いて分かる人は少ないと思いますが、山と川に囲まれ水の都と呼ばれる自然豊かな土地で新潟市とどこか雰囲気が似ている場所です。大きく違うのは海があることでしょうか。20年間、内陸県民でしたので海を見るのがとても新鮮で、土日になると毎週のように海の方に出かけるのが最近の休日の過ごし方になっています。

今年の4月から新潟に移り住んでいますが、魚も酒もおいしく（日本酒は苦手ですが）信濃川沿いはのどかで住みやすそうな土地だなあと感じています。同期からは「新潟の冬は大変」と口をそろえて言われており、この後の季節を少し心配しています。

さて、私は地元岐阜県の歯科技工士学校卒業後、大阪大学歯学部附属病院にて1年間、歯科技

工士研修生として臨床的な知識技術を学びました。主にクラウンブリッジ、審美修復に興味を持ち技術を磨いておりましたが、大学病院では義歯やクラウンブリッジなどの一般的な補綴物だけでなく、顎義歯やシーネ、顎骨3Dモデルなど多岐にわたると実感しました。そこで大学病院の特殊な症例に携わっていきたく強く感じ、本院の募集に応募したところ縁あって採用いただきました。

新潟大学の技工室ではすべての種類の技工物を担当するので覚えることが本当に多く、毎日が少し大変ですが様々な経験を積むことができ自身のモチベーションになっています。

執筆時、入職してから約9ヶ月が経ちますが自分の知識技術不足を痛感する日々ですが、患者さんと歯科医師の先生方によりよい技工物が提供できるよう精一杯努めてまいります。これからもどうぞよろしく願いいたします。

論文紹介

論文紹介

高度口腔機能教育研究センター 佐藤 友里恵

はじめに

シャルコー・マリー・トゥース病（CMT病）をご存知ですか？ CMT病は、末梢神経が障害されることで下肢の筋力低下や感覚低下を引き起こす遺伝性の神経変性疾患の1つで、日本国内では2000人以上の患者さんがいます。症状は時間の経過とともに進行し、患者さんは車椅子や寝たきりの生活を余儀なくされます。しかしCMT病の発症、進行の病態メカニズムは分かっていないため、根本的な治療法は確立されていません。本稿ではCMT病の病態に関する最新の知見を紹介します。

研究の背景

神経細胞には軸索という神経細胞からの情報を伝えるための突起があります。CMT病の病態の1つが、下肢の進行性軸索変性です。軸索変性因子「SARM1」は細胞が傷つくと活性化し、軸索の構造維持に必須である補酵素NADを分解し、軸索を崩壊へ導きます。特定の遺伝子の生体内の機能を解析するためには、遺伝子操作でその遺伝子を欠損させた（ノックアウト）動物を作成し、どのような変化が現れるかを観察します。私たちはまず、ヒトCMT病患者と同じ遺伝子変異を有するCMT病モデルラット（*Mfn2H361Y^{+/-}*）と*Sarm1*ノックアウト（*Sarm1^{-/-}*）を作りました。この2つのラットを交配して*Mfn2H361Y^{+/-} Sarm1^{-/-}*二重変異ラットを作製し、「SARM1が存在しない状態でもCMT病は発症するか？進行するか？」を検討しました。

研究成果

結論から話しますと、*Sarm1*の欠損でCMT病の

発症を完全に防ぐことはできませんでした。しかしながら、CMT病の症状の進行を劇的に緩やかにさせることが分かりました。*Sarm1*を欠損させると、*Mfn2H361Y^{+/-}*の進行性の軸索変性、神経と筋肉の接合部の異常、筋萎縮が改善しました（図）。さらに、これらの二重変異ラットではCMT病患者の神経で見られる、ミトコンドリアの異常が抑制されました。

おわりに

二重変異ラットではCMT病の症状が改善されていたことから、SARM1阻害がCMT病の治療候補となる可能性が示唆されました。

紹介論文

A SARM1-mitochondrial feedback loop drives neuropathogenesis in a Charcot-Marie-Tooth disease type 2A rat model
Yurie Sato-Yamada, Amy Strickland, Yo Sasaki, Joseph Bloom, Aaron DiAntonio, Jeffrey Milbrandt
J Clin Invest. 2022 Dec 1;132(23):e161566.

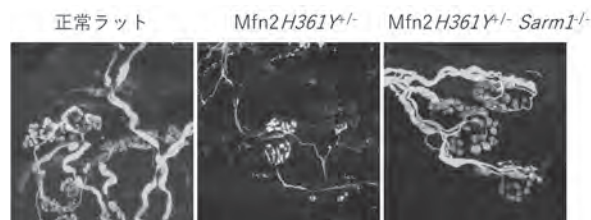


図1：CMT病（*Mfn2H361Y^{+/-}*）ラットでは神経筋接合部が萎縮しているが、SARM1が欠損したCMT病ラット（*Mfn2H361Y^{+/-} Sarm1^{-/-}*）では神経筋接合部の異常を認めない。

新潟歯学会報告

令和5年度 新潟歯学会例会報告

令和5年度新潟歯学会集会幹事
小児歯科学分野
大島 邦子

令和5年度新潟歯学会第一回例会は、7月8日（土）に歯学部講堂および第一講義室で開催致しました。11演題の一般口演に続き、「口腔がんに対する免疫療法—基礎研究から臨床へ—」と題して、富原 圭 教授（顎顔面口腔外科学分野）による教授就任講演が行われました。学外1名を含む110名（内Zoom参加30名）の参加がありました。

11月4日（土）には、第二回例会を開催致しました。学外2名を含む115名（内Zoom参加10名）の会員にご参加をいただき、一般口演15演題の発表が行われました。

コロナ禍で令和2年の総会は延期となり、その後、医療人育成センターに場所を移して再開となったところで引き継いだ集会担当でしたが、会場も歯学部講堂に戻り、会場入場者の制限もなくなったため、今回の第2回例会では講堂に一時立ち見ができるほどの盛況となりました。Zoomを併

用することで、遠隔地在住の大学院生や出張中の教員など、依然としてその利便性は享受しながらも、活発な質疑応答が交わされ、会場外でも久々に会う同級生・先輩後輩との交流がなされる様はやはり対面学会ならではの感じました。

総会、第一回例会、第二回例会において、お忙しい中、座長をお引き受けいただいた先生方をはじめ演者の方々やご参加いただいた会員の皆様のご協力により、令和5年度の新潟歯学会も滞りなく終了できましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

令和6年度からは予防歯科学分野が集会係を担当することになりました。第57回新潟歯学会総会は今のところ4月13日（土）に開催予定ですが、今後、日時および開催場所が変更になる可能性がありますので、詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください。（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>）。



第一回例会 教授就任講演
富原 圭 教授



第一回例会 教授就任講演座長
井上 誠 会頭



第二回例会 一般口演
質疑の様子



同窓会だより

同窓会だより

副会長 野内 昭 宏

2020年1月に日本上陸が確認されて以降、猛威を振るった新型コロナ感染症。罹患した人もいなかった人も、間違いなく歴史の証人になった出来事でしたが、昨年5月8日より感染症法上の5類感染症に移行して、それと同時にあらゆる活動が（感染予防を徹底した上で）以前の状況に急速に戻りつつあります。当同窓会もそれに則り、可能な限り以前の状況に戻りつつあります。

しかし、当会会員（歯学部卒業生）は、約3分の1は新潟県内、約3分の1は首都圏を含む上越新幹線沿線、残り3分の1はその他の全国各地にいらっしやいますので、どこか1カ所に集まることは現実的には非常に困難です。ZOOMを始めとしてICTで瞬時に繋がる方法も知ってしまった現在、両者を併用しながら、情報交換等を密に行っています。

まずは慶事の報告から。

山本武夫先生（歯学科7期生）が春の叙勲で瑞宝双光章を受章され、その祝賀会が9月9日に開催されました。（写真1）また、この原稿執筆中に、秋の叙勲で松田安雄先生（歯学科4期生）が

瑞宝双光章を受章されたという朗報が来ました。当会からも祝意を表させていただきました。

ここ最近、叙勲を始めとして各種表彰を受ける会員が多くいらっしやいますが、その多くが地域歯科医療と密接に関連したものです。地域包括ケアシステムや地域完結型医療を展開していく上で、歯科医療と地域との関わりは非常に重要です。それに関わる会員が多くいらっしやることは、歯科保健や公衆衛生、社会福祉の増進に少なからず寄与しているものと思われま。

9月17日、新潟大学歯学部同窓会支部長会議が開催されました。この会議は3年に一度行っており、前回の2020年はオンラインでの開催でしたが、今回はハイブリッド（新潟+オンライン）会議で行いました。連休の中日での開催でしたが、19支部中12支部と多くの支部長にご参加いただきました。

前述の通り、当会会員は全国各地にいらっしやいます。その地域の会員同士のコミュニケーションはもちろんのこと、地域を超えて会員全員とのコミュニケーションもまた重要です。コロナ禍で滞った活動から、各支部とも徐々にではあるが活動を再開し始めているとの様子や、同窓会の今後の活動についてのご意見など活発に情報交換を行いました。（写真2）



写真1 山本先生の叙勲祝賀会



写真2 支部長会議





印象に残っています。「健康」と言われると、口腔の健康はほんの一部のように感じますが、口腔が健康でなければ、野菜やお肉などバランスの良い食事をするのが難しくなりますし、口腔が不健康であることで全身に悪影響を及ぼす可能性もあります。歯科衛生士は、この口腔の健康の大切さを市民や患者へ伝え、さらに、自ら口腔の健康を守るための行動ができるよう歯科保健指導を行なっていく必要があると感じました。

今後、日本人の平均寿命が伸びていく中で、健康寿命との差をどれだけ縮小できるだろうかと考えることがあります。健康寿命の延伸に、口腔の健康がどれほど貢献できるのかはわかりませんが、全身の健康を支える大切な一つであると心に留め、今後も市民の健康を守るため歯科保健に取



講演中の葭原教授

り組んでいきたいです。

最後になりますが、このような貴重な機会を提供して下さった同窓会の皆様、講師の葭原明弘先生に感謝申し上げます。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	R5.10.6	岸 本 奈 月	包括歯科補綴学分野 特任助手	医歯学総合病院 医 員
退職	R5.10.31	岸 本 奈 月		包括歯科補綴学分野 特任助手
昇任	R5.12.1	堀 一 浩	包括歯科補綴学分野 教 授	包括歯科補綴学分野 准教授

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	5.8.31	花 崎 美 華		小児歯科・障がい者歯科 助教
採用	5.9.1	五月女 哲 也	小児歯科・障がい者歯科 助教	
採用	5.11.1	宮 本 茜	歯科総合診療科 特任助教	
採用	5.12.1	木 口 哲 郎	顎顔面口腔外科 専任助教	

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	5.8.31	由利由依		歯科衛生部門歯科衛生士
任期満了	5.8.31	大島千鶴		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	5.8.31	平原茉結		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	5.9.1	平原茉結	歯科衛生部門歯科衛生士	
任期満了	5.10.6	吉岡奈穂美		歯科衛生部門歯科衛生士
育児休業復帰	5.10.7	阿部春奈	歯科衛生部門歯科衛生士	
昇任	5.4.1	千葉香	東3階病棟副看護師長	東3階病棟看護師
採用	5.4.1	齋藤倫瑠	東3階病棟看護師	
採用	5.4.1	佐藤菜桜	東3階病棟看護師	
採用	5.4.1	宮島晴香	東3階病棟看護師	
採用	5.4.1	山本真衣	東3階病棟看護師	
育児休業	5.4.19	五十田緋奈野		東3階病棟看護師
所属換	5.8.1	真見美里	西8階病棟看護師	東3階病棟看護師
退職	5.9.15	佐藤菜桜		東3階病棟看護師
育児休業復帰・所属換	5.11.1	宮本文美	西7階病棟看護師	東3階病棟看護師

歯学部を支える方々

歯学部とのお縁に感謝して

歯学部学務係 石 栗 真理子

歯学部学務係の石栗と申します。新潟大学卒業後、平成23年4月に採用となり、医歯学総合病院で契約事務を担当後、五十嵐キャンパスで広報室、工学部学務係の勤務（その間、二度の育児休業期間）を経て、令和4年10月に歯学部事務室学務係へ参りました。主に学部学生の授業や実習、共用試験など、教務全般に関する業務をメインに担当させていただいております。

早いことに歯学部へ来てから1年が経ちました。歯学部の1年を経験させていただいた中で、春には新入生研修、そして夏にはオープンキャンパスとコロナ禍以降中断していた行事にも担当者として携わることができ、貴重な経験をさせていただいております。

歯学部学務係は職員4名で歯学部・医歯学総合研究科（歯）の両方の事務を担当しています。前部署（工学部）と比較しますと学生数は少ないものの、職員一人あたりの業務の幅が広く、学務係としては2つ目の学部の経験となりますが、最初は戸惑うことも多くありました。同僚や先生方から多大なるご協力を賜り、ようやく業務に慣れてきたところです。いつも、感謝申し上げます。

今後はよりスピード感をもって、学生のより良いサポートができるよう、日々業務を行ってまいります。まだまだ至らぬ点もあることと存じますが、頼りになる学務係職員を目指してこれからも精進してまいりますので、今後ともどうぞ、よろしくをお願いいたします。



私の経歴と歯学部での抱負について

歯学部事務室総務係長 小 西 充

令和4年10月から歯学部事務室で総務係長を務めている小西と申します。私は平成20年に本学に採用となり、当時の研究支援部から大学職員としてのキャリアをスタートしました。同部では、科研費等の外部資金に関する研究支援業務等に携わり、その後、学務部において学生の就職・キャリア形成支援等の業務に携わりました。直近では、歯学部と同じ旭町キャンパスの医学部で、5年半に渡り共用試験OSCE、CBTや臨床実習等を担当し、その間、共用試験の公的化への対応や、コロナ禍での診療参加型臨床実習の継続など、新たな課題に取り組む機会が多く、苦勞した分、学びの多い時間となりました。

現在の私の業務としては、人事、予算、会議運営から国際交流等まで幅広く担当しています。不慣れな業務もありますが、私は新しい業務に取り組むことに楽しみを感じるため、幅広い業務に携われる現在の環境が性に合っているのかもしれない。一方で、歯学部への異動により、およそ10年ぶりに学生の皆さんとお話する機会がほとんどなくなったことは、大きな環境の変化でした。

学生支援こそ大学職員として一番大事な仕事！と思っている自分にとっては、少し寂しさを感じる状況ですが、充実した大学生活を送ってもらえるよう、学修環境の整備等でも学生の皆さんを支えられたらと思います。

さて、第4期中期目標期間は、コロナ禍でのスタートでしたが、この1年は、大学に本来の教育研究活動が戻ってきたことを実感する1年でした。今後も学内外をリードする歯学部であり続けられるよう、微力ながら事務部門として貢献できればと思っています。

最後に、私の趣味について紹介します。この数年は、キャンプ、釣り、虫採り、スキーなどのアウトドアでの遊びや、自宅では草花の手入れや、魚の世話、毎年、山で捕まえてくるカブトムシやクワガタの世話を楽しんでいます。また、美味しいお酒を飲むことも好きなので、歯学部の先生方と業務外でも交流を深められる機会を持って嬉しく思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



編集後記

この度、初めて歯学部ニュースの編集委員を務めさせて頂きました。まず、お忙しい中、原稿執筆にご協力頂きました皆様方に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。これまで読者側であった自分が編集に携わることができ、非常に感慨深い気持ちです。歯学部ニュースを読む度に、新潟大学歯学部のアクティブさを感じます。歯学部学内の方のみならず、学外の方にも歯学部の活動を広く発信できる本誌に、いつかまた携わることができれば幸いです。今後も歯学部ニュースの発刊を楽しみにしております。

う蝕学分野 井田 貴子

まず、歯学部ニュース144号発刊に際しまして、原稿作成にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。歯学部ニュースの編集に携わり、コロナ禍で制限されていた様々な活動が、戻りつつあるなと実感いたしました。コロナ感染が落ち着いても、世界情勢は不安定な状況ですが、歯学部に関係する皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。この度は誠にありがとうございます。

顎顔面口腔外科分野 齋藤 タ子

この度は皆さんお忙しい中、原稿を執筆していただき感謝申し上げます。執筆は何度かしたことがあります、編集委員は今回が初めての経験となります。私は主に学生の皆さんの原稿を担当しましたが、関係各所の皆様が楽しみにしている歯学部ニュースの編集ということで、公になる前の大事な原稿をお預かりし確認するということは、楽しみ半分、重責半分という複雑な感覚でした。無事発刊する運びとなり、ほっと胸をなでおろした次第です。この経験から今後の歯学部ニュースを読む楽しみが一層増しました。改めて御礼申し上げます。

歯科総合診療科 佐藤 拓実

17年以上目にしてきた歯学部ニュースですが編集委員を務めさせていただくことで、どのように歯学部ニュースが作られてゆくのかわることができました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。学生の皆さんの原稿を多く担当したのですが、コロナ禍で失われていた活動が戻りつつあることを知ることができてよかったです。この度の原稿の執筆にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

組織再建口腔外科学分野 須田 大亮

この度、歯学部ニュース144号の編集長を務めさせていただきました。新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、日常を取り戻しつつある中で、多くの皆様に書いていただいた原稿は、人と直接関われる喜びに溢れていました。中でも、対面で再開された各学会の受賞報告は例年の2倍の数となり、学内の皆様のご活躍を報告できたことを大変嬉しく思います。最後に、執筆を快諾していただいた先生方、職員の方々、学生の皆さん、編集作業に携わられた委員の方々に厚く御礼申し上げます。

口腔解剖学分野 川崎 真依子

歯学部ニュース

令和5年度第2号（通算144号）

発行日 令和6年3月6日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 川崎真依子、寺尾 豊
編集委員 井田 貴子、齋藤 夕子
佐藤 拓実、須田 大亮
印刷所 (株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ：

撮影地：福島県耶麻郡（五色沼）

撮影日：2023年10月

使用機材：OM SYSTEM OM-5/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／焦点距離：31mm・絞り：F5.6・シャッター速度：60分の1秒（絞り優先自動露出）／手持ちハイレゾショット

裏表紙の撮影データ：

撮影地：新潟市秋葉区（中野邸記念館）

撮影日：2023年11月

使用機材：OM SYSTEM OM-5/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／焦点距離：12mm・絞り：F4・シャッター速度：60分の1秒（絞り優先自動露出）／手持ちハイレゾショット

コメント：今号では紅葉つながりということで、表紙には、福島県の五色沼（毘沙門沼）を、裏表紙には市内秋葉区の中野邸記念館を題材としました。五色沼では磐梯山を背景にカエデの濃い赤を、中野邸では雨に濡れたもみじ園の石段の落ち葉を印象的になるように手持ちハイレゾショットを使って収めてみました。木と大気と水と土のコラボレーションを狙いとしたのですが、昨夏は記録的猛暑だったために、なかなか紅葉の撮影に適するタイミングがありませんでした。

本誌中の写真の使用機材

ボディ：OM SYSTEM OM-5

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。